

空巢

二幕

八木柊一郎

登場人物

夫 高村とよばれる中年の男
妻 琴江とよばれる中年の女
息子 順とよばれる若い男
娘 夏江とよばれる若い女
女中 リカとよばれる若い女
男 穴山小太郎または赤沢伸吉とよばれる中年の男

*

舞台はすべて高村家といわれる囲いのなか。

第一幕

ブラインドでつくられた幕のそとに、**男**が登場し、前口上。
観客歓迎の辞につづいて、

「空巢……、という言葉には申すまでもなくふた通りの意味がございます。誰もいない家と、その家に侵入する人間。……その人間を、わたくしが演じさせていただきます。いわばこのお話は、わたくしの失敗談、あるいは成功談といったものになるうかと存じます。」
と、しめくくり、下手へ行き、ブラインドの棧に指を触れる。

男
……では。

ブラインド全面がかすかにひらき、同時に電気カミソリの音とシャワーの音がきこえてくる。
男はブラインドの隙間から内部をのぞき、そして下端に手をかけて一気に押し上げる。
ブラインド全体が（幕が）上がり、舞台があらわになる。男は下手隅に行き、舞台を見る。

一 へ三つの部屋へ

それぞれ、三つの小ブラインドで構成された囲いの中で、息子の順が電気カミソリでひげを剃り、娘の夏江がシャワーを浴びている。

シャワーの音も電気カミソリの音も異常に大きい。

顔を剃り終った順は一旦カミソリを置くが、鳴りつづける音にうながされてまた手にとり、頬のあたりへもっていかうとすると、

「サンルームへ集合！」という、一家の主人高村の声がとんでくる。

順、夏江の方へ行く。

息子 ……集合、サンルームへ集合だって。

娘 ……(シャワーを浴びつづける)

息子 サンルーム！

娘 いったい……

息子 ……？

娘 お父さまやお母さまと感覚的にどこがちがうんだっていうから云ってやったわあたし。まるつきり絶対的にちがうんだってどこがちがうなんてもんじゃないって。そしたら、まるつきり絶対的にちがうんだってたらちがうがちがわないかなんてこともまるつきりわからないくらいちがうはずだっていうから云ってや

たわ。そのとおりだって。

息子 そしたら？

娘 じゃアまるつきりおなじかも知れないってこともあり得るっていうから云ってやったわ。それはあり得ないって。

息子 あり得ないかね？

娘 ……………

この時、もう一つの囲いに照明。モーツァルトの“キラキラ星の主題による変奏曲”がきこえてくる。

囲いの中には琴江がいる。そこへ順が行く。

妻 ……モーツァルト、好き？

息子 演奏は？

妻 クリストフ……（息を強めて）エッシェンバッハ。

息子 ……サンルームへ集合だって。

琴江、囲いの外へ出てきて、宙をみつめる。

妻 ……テラスに。

息子 サンルーム。

妻 テラスに！

息子 ……………

妻 それから窓にも、ゼラニウムの鉢が置いてあったわ。陽がいっぱいあたって。…………ここだわ！ きっとここだわってあたし、女の顔を待ってた。

夏江が服を着ながら近づく。

妻 ……女が、窓からジョーロを突き出してゼラニウムに水を。…………おばあさんなの。ばあや。女主人はまだベッドでコーヒーを飲んでいるにちがいないってあたし…………でももう、待てなかった。うちの、すぐ近くなのよ、すぐ。

息子 ……………

娘 ……………

女中のリカが登場。

女中 失礼します。あの、旦那さまがお呼びですけど。

妻 ……あなた、ゼラニウムって花、好き？

女中 は…………？

息子 ゼラニウム。

娘 ちよっと変なおいがする赤い花。

女中 どんな花ですか？

妻 まあ、知らないの？

そこへまた「サンルームへ集合！」の声。

妻 いま行きます！（「キラキラ星」がたかまる）

音楽が鳴りつづけるうちに、ブラインドがとりはられ、舞台はへサンルームへかわる。そこには高村が家族を待ちかまえて坐っている。

二 へサンルームへ

家族が集まり、高村が口をひらこうとした途端、
「キラキラ星」がやむ。同時に家族は、
へ静止する。

男が、口をひらく。

男 ……高村順造、と、表札には出ておりました。青銅のプレートに横書きで文字を浮き彫りにした、立派な表札です。しかし、住んでいるのはもちろん高村順造一人ではなく、家族がおります。そして女中が一人。私をひきとめ、私をつかまえたのは、その女中です。……そもそも、私の職業からいえば、一軒の家がありそしてその家にくぼくかの金かなにがしかの物があれば足りるのに、ひよんなことから私は、金でも物でもない、いわゆる家庭というものとかかわりを持ってしまった……。目に見えるものと目に見えないものによって成り立っているひとつの完全な構造……。この家。この家庭と、かかわりを持ってしまった。本来の、忍びこみ、盗み、すばやく去るといった形式にのっとることができず、忍びこみ、見つかり、そのまま居すわるという破格の形式が私を待っていたのです。それは、避けることのできなかつた形式でもあり、また一面では、私自身がえらんだ形式でもありました。私はいわば、向上心に燃え、変化と進歩をのぞんでいたのです。……おそらく、この家庭のメンバーもその点については私とおなじ気持だったのだと思われます。閉じこめられ、そしてそれに慣れた人間は悪足掻きをしない。だがこの家庭は、なかでも世帯主高村順造氏の現状打破への意志、もしくは現状打破による現状維持への意志は、とりわけ、けなげなものでありました。

男は退場し、四人は〈静止〉をやめる。夏江は髪から手を離すと同時に椅子からとび降り、そのひょうしに順が床に尻もちをつき、琴江は眼を落して刺繍をはじめ、高村は言葉を発するという具合。

夫 つまり、私が提案したいのはね。

娘 ちよつと待って電話をかけなきゃあたし大変だわ忘れるところ。

夫 あとにしなさい。

娘 だめよ。

妻 そうそう、薬……（立ち上がる）

息子 持ってきてやる。（歩き出す）

夫 あとにするんだ！

三人、静止する。これは意識的な静止。琴江がピアノをひくしぐさを見ると、琴と尺八による
“キラキラ星”の主題が鳴り、それに合わせて順と夏江が席に戻る。

夫 ……もういいかね？

妻 どうぞ。（刺繍に戻る）

夫 ……つまり、私の提案というのは、

妻 あなた、着替えをなさったら。

夫 ……

妻 （奥へ）リカさん。

女中の声 はい

妻 旦那さまの着物と帯を。

夫 いいんだ。いいんだよ。持ってこなくてもいいぞ。

女中の声 はい

夫 ……私の、提案というのはね、

娘 順……煙草とって。

妻 ここにあるわよ。

娘 それはだめ。

息子 (煙草の箱を見て) これは、ない。

娘 パパ、ルナ持ってる？

夫 (やけっぱちにうたい出す) ルナ・ロツサ……

詩吟めいたシャンソンだが、歌は意外と美しい。聞き惚れるていの三人。

夫 (スネークアウトで歌をしぼり) ……もういいかい？はなしをはじめてもいいかい？

妻 どうぞ。

夫 ……おまえたちは、(三人の反応をたしかめて) ……きみたちは、いずれも、芝居がかったことが好きだつまり日常的なことが嫌いだ。……ところで今日、私がきみたちにお願ひしたいと思ってるのはね、い

わば、芝居がかった日常的行動といえるものについてなんだよ。

娘 穴山さんのお話はもう終わったの？

夫 まだしておらん。その話をこれから、

妻 穴山さんという人はね、パパの恩人なのよ。そのひとの息子さんが今度、

娘 オンジンって……？

妻 恩のあるひと。

娘 恩をあたえたひと？ あたえられたひと？

妻 きまってるじゃないの。

娘 恩っていうのはだいたい何なの？

妻 恩というのは。

息子 (突然叫ぶ) オント！

妻 え……？

息子 (びよんびよん跳びながら) オント！ オント！

夫 順！

息子 眼玉のとんぼ！ オント！ オント！ 燃えたつ焔炉！ (走って) わが身を焦がせ、わが身を鎔かせ！

娘 (反対側に走って) わが身をさらえ！ わが身をくらえ！

息子 (びよんびよんと戻って) オント、オント。(夏江に) おまえは、泥だ！

娘 (順に) おまえは、泥だ！

息子 (恥ずかしそうにちぢまって) ああ。

娘 (誇らかに伸びをして) ああ……。

高村、とうとう我慢できずに席を立つ。

妻 (真剣に) 待ってあなた! ……さあ。お父さまのお話を聞きましょう。(と、ゆっくり首と上体をゆ

らめかせる。それにつれて琴によるモーツァルトのセレナーデが流れる)

夫 (戻って) もういい。首を振るのをやめてくれんかね。

妻 ……(静止し、旋律が消える)

夫 私が提案したのはね、一時的休戦……いや、休戦という言葉は不適當だろうな。我々はべつにたたかっているわけじゃないんだから。

息子 (はじめて真面目に) たたかっているんじゃないかなやっぱり。

夫 私はそうは認めないね。きみたち同士はどうか知らんが、少なくとも私ときみたちはたたかっている。対等ではないんだから。

息子 対等ではないからたたかっている。

夫 それならそれでもいい。

息子 じゃア、休戦、ですか? 提案というのは。

夫 ちがう。(考えて) ……秩序。そう、一時的秩序だよ。

妻 秩序……?

娘 一時的?

夫 一時的でなくても一向かまわんけれども、とにかく、穴山小太郎氏の滞在中は、この家に一種の秩序がもたらされる必要がある。これに尽きるんだよ私の云いたいことは。

妻 でも、秩序なら、ちゃんとあると思うわすでに。

夫 ……そう。私もそう思う。秩序というものは必ずしも見た目の上のことだけじゃないからね。外面は乱れていても内面はきちんとしていることだってある。(息子の足を思いきりけとばす) しかし問題は、やがてやってくる穴山小太郎氏の眼に、われわれ一家がどう映るかということであって、その場合、穴山氏の考えているところの一種の秩序とわれわれの間に現在ある一種の秩序とはかなりちがうものだということ、それをはっきり認識する必要があるということ、これなんだよ私の云いたいの。……そうだろ、琴江。うちに一種の秩序があるとしてもだね、世間でいう秩序とはちよつとちがうだろ？

妻 そうね。ちがうでしょうね。

夫 ありていにいえば、まず、おまえ。……きちがい染みてる。(息子に) おまえは、きちがいに似ている。……(娘に) おまえは、きちがいぶってる。みんな、みとめるね？ ……少なくとも否定はしないね？ ……よろしい。これで話がしやすくなった。

妻 ご自分はどうかなの？

夫 え……？

息子 きちがい以下。

娘 きちがいいくずれ。

夫 おまえたちには私という人間に定義をくだしたりする資格はない！

妻 なぜ？

夫 生活人ではないからだよ。真の意味において生活能力があり自主独立しているのは私だけだ。

妻 あら。私だけよ、真の意味においては。

夫 現実的には私だけだ！ ……（つとめて気をおちつけて。その結果、変に声が低くなる）しかし、私も、穴山小太郎氏、ということとは小太郎氏の父親の穴山徳太郎氏ということだが、彼を無視することはできない。ご承知のように、私の事業は穴山徳太郎氏所有の五十万坪の土地によって支えられている。私がメトロポリタン・ドリームランドの経営者におさまっていられるのは、タダ同様の安い地代である土地を穴山さんから借りることができたからだ。なぜ私がそういう幸運に恵まれたか、それはもう何度も話したね。私がいまず自分の身を犠牲にして穴山さんに幸運をもたらした。情は人のためならず、まわりまわって私に運が向いてきた。われわれの今の生活は、中流、というより上流といってもいいものだ。…しかし、人間誰でもそうであるように、すべて自力で自分を支えているわけじゃない。いいかい。穴山さんは私の人格を期待し、今でも私の生活を見まもっているんだよ。お金や土地をいっぱい持っているひとは、それに見合うところの信念や道徳をいっぱい持っている。それは当然なことだ。その道徳が暗黙のうちに契約のなかにはいつていることは当然なことだ。そうだろう？ 穴山さんは、私の一家の秩序と、一種の美しさ…、そう、そういうものを信じている、期待している。そして、もし、もしもだよ、穴山さんの期待を裏切るようなことがあったら、私と穴山さんとの間の契約はすべて破棄されると考えなければならぬ。いいかい。もしわれわれが今の生活をつづけていきたいと思うなら、穴山さんを裏切ってはいけない。少なくとも裏切られたと思わせてはいけない。このことに失敗したらわれわれは破滅する。本当なんだよこれは！ ……協力、してもらえらるだろうね？ 私から離れて自活しようなどという甲斐性のある者はいないだろうが、そういう覚悟で家を出るといことも、私は禁止する。理由はどうであろうと、わが家の秩序を乱すということになるからね。…しかし、私は、普通以上に厳格な道徳を守れと云っているわけじゃない。むしろ、普通であればいいんだよ。人間として普通にしていってくれば、そ

れでいいんだよ。わかるかい。

妻 私は、普通よ。

娘 私も。

息子 私も。

夫 ……まだわからんのか？ ……琴江。生活に何の不安があるというわけでもないのに得体の知れぬ宗教に凝って、ひげもじやの男と十日もはつかも部屋にこもりつきりになるなんていうことが普通かね？

妻 あのひとがひげもじやだってことをまだ根に持ってるのね。

夫 のっぺりしてたっておなじことだ！

妻 おなじじゃないわ。のっぺりはいや。

夫 いやだのいやじゃないだのってことじゃない。

妻 あの時あたし、あのひとと^{てのひら}掌と掌を合わせたぐらいで、それ以上のことは何にもしなかったわ。

夫 何にもしなかったというのが本当なら、それはそれで普通じゃない。本当はいろいろあったというんなら、それこそ、ごく普通の意味で普通じゃない。

妻 あなたには基準というものがない。

夫 私になくたって世の中にはある。それが私の基準だ。

妻 あなたの想像力は、全部エロティック。エロティックなものにしか通用しない。

夫 それはおまえだ。おまえのやること考えること、全部セックス。セックスに発しセックスに終る。それに発せず、それに終らないことだってあるんだぞ。

妻 そうよ。そうなのよ。

夫 そうなんだよ。

妻 それがあなたにはわかってない。

夫 それがおまえにはわかってない。

息子 …………… (高笑い)

夫 順。…………次はおまえだ。バス、バスの通らない道に自分でバス停のしるしを立てて、朝から晩まで来もしないバスを待っているなんていうことが普通かね？

息子 バスは来ましたよ。

夫 来た…………？

息子 貸切りバスだから止まらなかったけど。

夫 あたりまえだ。

息子 でも、ぼくのうしろに三人並びましたよ。

夫 それが面白くてやったんなら、ますます。

息子 それだったら子供の遊びだ。バスは来ませんよって教えてやったんですよぼくは。

妻 そうしたら？

息子 そんな出たらめを云ったってだめだって。

妻 え…………？

息子 昨日ここでバスに乗ったんだから、バスは来るって。

妻 誰がそう云ったの。

息子 一番うしろに並んだひとが。

妻 本当なの、それ。

息子 バスは結局来なかったから、嘘でしょうね。

妻 なぜそんな嘘を。

息子 いや、その日は来なかったけど、前の日は来たのかもしれないし、嘘だという証拠はないですよ。

妻 それはそうね。その人は男だった？ 女だった？

息子 ……さあ。

妻 さあ……？

夫 もういい！（息子に）おまえは、自分というものをもてあそんでいる。しかも、悲しみとかよろこびとかそういう一切の感情なしにだ。（娘に）おまえも同じだ。ろくろく知りもしない男としめし合わせて、区役所へ本当の結婚届を出し、三日たって今度は離婚届を出すなんてことが普通といえるかね？ おまえはもう戸籍の上じゃ、結婚と離婚の経験者なんだぞ。

娘 実際の上でもそうよ。

夫 それはどうかわかるものか。

娘 本当なのよ。

夫 どっちにしても遊びだ。タチの悪い遊びだ。普通じゃないんだよ要するに。（三人に）そうだろ。……私がおもい普通でないんなら、おまえたちはみんな普通だろうさ。しかし、穴山さんの眼から見れば、普通でないのはおまえたちのほうだ。これはもうわかりきってる。そしてだ。穴山さんがおまえたちを普通でないと思えば、おまえたちを養ってる私も、いいかい、私も普通でないという判断がくだされるんだよ。その結果がどういふことになるか考えてごらん。もともと、穴山さんは、私に土地を貸してそこか

ら利潤を上げようとしたわけじゃない。私と穴山さんの間にあるのは一種の道徳的契約なんだよ。ところが私にとっては、その道徳的契約が多大の利益を生み、ひいては、おまえたちの生活を保証しているということになる。この関係がバランスを失えば、結果は明白だ。私も、おまえたちも、裸になってしまう。それがおのぞみなら、何をかいわんやだ。しかし、おまえたちにはそれほどの勇氣はあるまい。……どうだい。穴山小太郎氏滞在中は、普通にしていくれるかい？自分のためなんだよみんな。

妻　そもそも、穴山さんの息子さんが地方から出てらっしゃるのは、私たちの生活を視察するのが第一の目的なんですか？

夫　そう思う必要があるということなんだよ。小太郎さんはホテルじゃなくてこの家に、われわれとひとつ屋根の下に滞在したいと云ってきてるんだからね。それこそ普通じゃないよ。

娘　なぜことわれなかったの？

夫　ことわる？　それが出来るくらいなら、

娘　それができないほど、うちは穴山さんというひとに依存してるの？

夫　そうだよ。きみたちが私に依存しているように。人間は誰でも誰かに依存しているようにだ。

娘　どんなひと？　穴山小太郎さんって。

夫　そんなことは問題じゃない。小太郎氏の眼にこのうちが健全なる家庭に映ればそれでいいんだよ。

娘　でも、何が健全で何が不健全かということは……

夫　何が健全で何が不健全かということを議論している余裕はない！　必要もない。……常識。あるいは良識。それで沢山。

妻　……お話は、よくわかりました。……あなたがこんなに一生懸命になったところ、はじめて見たわ。

夫 おれのいうとおりにしてくれるんだね？

妻 努力してみます。あなたのために。

夫 自分のためだ。

妻 あなたのためです。

夫 ……それは、どういう意味だ。私のためとは。

妻 そのままの意味です。すべて、あなたのため。（退場）

夫 ……

息子 ママはあなたを愛してる。（何か云いかける高村を制して）そういうことは今は関係ないとおっしゃりたいんでしょう。そこがあなたのウカツなところだ。まずママを理解しなさい。そこからすべてが始まる。

夫 親に説教はいらん。

息子 親はだんだんものを忘れていく。子供はだんだんものをおぼえていく。お説教のいるのは親のほうだ
と思うな。

夫 おまえは、私を理解しとらんのだ。私の立場を。

息子 ……理解していない部分が、すこしでも残っていたら……。ほんとに、それがすこしでも残っている
ことをのぞみますよ。切に。（立ち上がる）

夫 待て。……私ほね、今度のことはおまえたちがまともになるいい機会だと思ってるんだよ。きりをつけ
るということも、やってみればなかなか生甲斐を感じるもんだぜ。

息子 きりをつける……？

夫 そう。

息子 簡単に云いなさんな。自分はなにひとつきりをつけたこともないくせに。

夫 順！

息子 安心なさい。……協力しますよ。……一応は。(退場)

娘 あたしもそんなところね。協力します。ひとまずは。(退場)

夫 (どなって) おぼえておけ！ おれなしでは一日だって生きては行けないんだぞおまえたちは。いいか！

女中のリカがとんでくる。

女中 お呼びですか。

夫 ……リカと云ったんじゃない。いいかと云ったんだよ。

女中 そうですか。どうも。

夫 ああ。実はね、二、三日中に穴山さんというひとがうちに来て、当分滞在する。

女中 はい。

夫 大切なお客さんだからね。大切に頼むよ。

女中 かしこまりました。穴山さんですね。

夫 穴山小太郎。私の恩人の息子さんだ。(退場)

女中 (自分にいい聞かせるように) 穴山小太郎……。 (ひと息のみこんで、退場)

“男”が登場。

男 ……彼女、穴山小太郎という名前を、文字どおりのみこんでしまった。のみこみが早く、実に素直なんです。

三 へサンルームとへ庭

リカが登場して、部屋をかたづける。

男 ところで、いつものように私は、忍びこむ五日前から高村家の状況を観察しました。高村夫人は一日おきに規則的な外出をし、規則的な外出をしない日も不規則な外出をして、昼間はほとんどうちにはいない。女中さんは夕方必ず買物に出かける。……実をいうと、この観察期間というのが私にとって一番のしい期間でした。時には目的を忘れて観察だけに没頭できたらと身分不相応なことを考えることもありました。そうなんです。この家という囲いの中で、いやらしくもまた平和に存在する家庭というものをあれこれと空想するだけで生きていけたらどんなにのんきでしょう。……しかし、もちろん私にはそんなのんきさを保証してくれるものは何もなく、私にとって必要なのは、段どりにしたがって決まったことを繰返

すということ、それだけです。食うために働き、働いて生きる。そのための仕方なしの繰返し。やめることのできない繰返し。いったいなぜ人間はそういう繰返しをやめようとしなのだろう、というようなことを全く考えるひまのない、せつつかれのくりかえし。

この間に琴江がリカに言葉をかけて外出して行き、リカも夕方の買物に出かけて行く。

男 この高村家の場合も、ご他聞にもれずせつつかれの法則にしたがって行動にうつり、まあまあ収穫をあげました。このカバンは、もともと私のものですが、中身はこのうちのもの、この背広はこのうちの主人のものですが、中身は私のものといった具合です。……ところが、私のいつもの繰返しは、この日突然、狂いを生じました。高村家というのは予想以上に近代的で、個室には全部鍵がかかっていたんです。鍵が。……その鍵をあけるのに計算外の手間を食い、自分できめた十五分という制限時間を五分以上オーバー。女中のリカさんの夕方の買物は早くて二十分、おそくて三十五分。まだよまだよと心に念じながら勝手口に戻ると、いけません、ガチャリと鍵の音。(家の中へ戻り、サンルームをとって、庭へお入り)……通用門まで約十五メートル。しかし、私がそこへ行きつく前に、なぜか女中のリカさんが庭のほうに廻ってきた……。もはや逃げ道はありません。

リカが登場。

男をみとめて、一瞬、沈黙。

男 ……こんにちは。

女中 ……こんにちは。

男 こういう場合、余計なことは云うべきではない、あくまで受け身であれ、というのが私の生活の智恵です。

女中 ……ああ。おたくさまは、穴山さんですね？ 穴山小太郎さん。

男 え……、ええ。……私は、穴山小太郎であることを肯定したわけでも否定したわけでもありません。つまり、嘘をついたわけでもつかなかったわけでもない。ほら、よくあるでしょう。食うために、生きるために、それは絶対に仕方のないひとつの行動であった。……しかし、それだからといって許されるものではなく、その立場をとることによって自分が仕方なく変えられてゆく……。まさにこの時の私がそうだったんです。（この間に、リカは男に話しつつ、カバンをとり、家の中へ招じ入れ、男をソファに坐らせる）

女中 お靴は玄関にお廻ししておきます。（玄関のほうへ）

男 この時、はだして飛び出せば……。けれど、お恥ずかしいことに、はだしでとび出すことが私は恥ずかしくなかった……。

ブザーの音。

女中 きっと奥さまです。（去る）

男、身をすくませて立ち上がる。

琴江が登場。鮮やかな色のドレス。それがよく似合う。

二人の間にまた長く短い沈黙の一瞬。

妻 ……いらっしやいませ。高村の家内でございます。

男 こんにちは。

妻 どうぞ。どうぞおかけになってくださいまし。

男 …… (坐る)

妻 お疲れでございませよ。ご旅行は、飛行機で……

男 いえ、車で……

妻 そうですか。……わたくし、琴江と申します。ふつつか者でございしますが、よろしく……

男 …… (頭をさげる)

琴江はにこやかに話しつづけ、男は独白。

男 ……全くの受け身で、つまり、私の態度は、状況への埋没以外の何ものでもありませんでした。しかし、すこし厳密にいうと、私はけっこう創造的な場に立っていました。あくまで受け身ではあれ、まだ経験したことのない、したがってどの面からいっても新鮮な、したがって価値のある、本当はないのかも知れないが相対的にはこのとき絶対に私にとって価値のある、ひとつの場。そういう場に生きていると実感

することができた。近代的な感じってものは、こういうもんなんでしょうか!?

妻 (あでやかに笑って) お口がお上手ですこと。わたしなんかもう……。

男 いえ。決してお世辞では……

妻 では、のちほどまた。すぐにお部屋の支度をいたさせますから。

男 部屋……。

妻 申しわけございません。お見えになるのは、あすかあさってかと存じあげておりましたものですから。

男 ……………

妻 失礼します。(退場)

男 ……部屋。私の部屋!?

リカが茶菓をもって登場。

女中 ……お疲れでございませよ。ご旅行は、飛行機で、

男 いえ。汽車で。

女中 そうですか。わたくし、リカと申します。ふつつか者ですが、よろしく。

男 …………… (琴江に対してと同じように頭をさげる)

女中 ……早速で失礼でございませすけど、舌平目のムニエルはお嫌いではございませんか?

男 舌平目……??

女中 もし何でしたら、お好きなものをご用意いたしますが。

男 いや、べつに……

女中 そうですか。では、お部屋の支度ができましたらお知らせいたします。(退場)

男 ……一瞬の空白。……そう、ここで私は、逃げるということができたはずでした。玄関へ行つて靴をとつてくる余裕だつてあつた……。しかし私は、動かなかつた。近代的というその上に、抒情的ともいえるものが加わつて、私のなかに、ひとつの欲望が頭をもたげてきました。歌謡曲しか聞かなかつた男が、突然クラシック音楽の美しさにめざめたような。

ヴィヴァルディの「四季」の「秋」の旋律が急にきこえてくる。

男 せっかくのこの宿命。……もうすこし、もうすこし居てみたい。……生れてはじめて味わう、ちゃあんとした家の、ちゃあんとした感じ。そこはかとなく、あまあい香りがたちこめているような、ぜいたくな雰囲気。……奥さんはきれい。女中さんは可愛い。もうすこし、もうすこし居たい。それに、この私はいったい誰なのか、それがさっぱりわからぬくすぐつたさと面白さ。もしかしたら、いつまでもこの陶酔の時がつづくのかも知れぬ。つづかないとしたら、いつ、どんな風に終るのか、そのぎりぎりのところでこの身をおいてみたい。とことんまで、そう、カタストロフのくるその時まで、ここにしよう。こんなに、期待と不安で胸がふるえるのは、この一瞬が充実している証拠。いわば、過ぎし青春の日のある一瞬のように。

女中 (いつの間にか登場して) 穴山さま。……小太郎さま。

男 ……(はっとして我にかえる)

女中 お部屋にご案内いたします。

男 ……わたしの、部屋。

女中 はい。お二階なんです。……どうぞ。（カバンを持って先に立つ）

男 ……（棒立ち）

女中 穴山さま。

男 ……今、行きます。

リカ、退場。

男 （つぶやき）穴山小太郎。……（自分に云いきかせて）穴山小太郎。（ぐっとひとつ息をのみこむ）

“四季”がたかまって、

— 暗転 —

四 〈和室〉

夜。

琴江がつつましい和服を着て、つつましく花をいけている。
但し、そのつつましさを放り出してしまう瞬間もある。

女中の声 おかえりなさいませ。

高村が登場。

妻 (つましく) おかえりなさい。

夫 ……どうしたんだい。ばかにまた、

妻 (口に手を当てて) しいい……。

夫 …………？

妻 ……お見えになったのよ。穴山さま。

夫 お見えになった？

妻 ええ。

夫 ……お見えになった。(しきりに反芻している)

妻 …………。(すまして花をいじっている)

夫 ……それで、どこに？

妻 二階の空部屋あき。……私たちの寢室を提供したほうがよかったかしら。

夫 いや、それには及ばんよ。……お見えに、なったんだね？ ほんとに。
妻 ええ。
夫 ……じゃ、……挨拶してくる。
妻 ちよっと待って。
夫 ……
妻 一応あたし、うかがっておきたいの。
夫 なにを。
妻 あのひとが私に欲望を抱いたら、どうすればいいの私は。
夫 欲望？
妻 あの人、ぞくつとするような目で私を見るのよ。そりゃアもう……
夫 おい……
妻 ナイーブで、図々しくて、淡々としていながらも欲しそうで、上品そうでお下品なの。
夫 ……とにかく、たしかめてみる。
妻 たしかめてみるって、なにを？
天 穴山小太郎氏がどんな人間か、
妻 どんな人間か、そんなことは問題じゃないっておっしゃったじゃありませんか。問題なのは状況。
夫 そうそう。その状況を、見てくる。
妻 見たのよあたしはもう。
夫 見た？

妻 あの一ひとの、欲望にもえた目を。

夫 ……………

妻 あの一ひと、私を欲しがるわ。まず私を。

夫 そんなはずはない。(と、行こうとする)

妻 (立ちはだかって) どうして。どうしてそんなはずがないなんて云えるの。

夫 とにかく、本人に……

妻 あなたの覚悟を先にきかせて！ 私をもてなしの道具につかうかわらないか。……私は、あなた次第よ。どんなことでも一生懸命にやるわ。

夫 ……すぐにそう思いつめる。そういうところがおまえの普通じゃないところなんだよ。

妻 でも、

夫 もし穴山さんがそんな風だったらその時はその時でおれも考える。肝腎なのは、まず普通になることだよ。普通に。

妻 でも、私は、自分でこれが普通だと思うようにしかできないわ。

夫 努力してみるって云ったろ。

妻 努力？

夫 うむ。

妻 そうね。……でも、努力っていったいなに？ どんな行動が、どんな気持が、努力っていう言葉にあた
いするの？

夫 ……それは、

妻 おしえて。

夫 ひとことで云えば、努力というのはまず……、自分を、おさえることだよ。

妻 自分を……？

男 そう。

妻 自分の、なにを？

夫 自分のなかの、特別なことを。

妻 特別なことって……？

夫 普通でないものさ。

妻 あたしのなかの特別なものが本当は普通のもので、普通のもものが本当は特別なものだとしたら、私は自分のなかの普通のものをおさえて特別なものだと思うものをそとに出せばいいの？

夫 ……（わからなくなる）

妻 ねえ、おしえて。

夫 そ、そういうところが普通じゃないんだよおまえは。どことなく、かたよってるんだよ。

妻 すべてが特別だっていうこと？

夫 ……まあ、そうだ。

妻 じゃア、自分のすべてをおさえればいいの私の場合は。そうすれば、普通になるの？

夫 なるかもな。

妻 じゃ、普通だってことは、自分がなくなるってことね？

夫 ある意味ではね。

妻 ……いや。自分をなくすのは、いやよ。

夫 琴江。

妻 ……

夫 ……（しんみりと）おれはね、おまえのすこし普通でないところを、ほんとうは愛してる。しかし、そういう自分を、おさえなくてはならんと思ってるんだよ。おまえを普通にすることがほんとうの愛情だと思ってるんだよ。…じゃ、いいね？ たのむよ。…自分を、おさええるんだよ。…着物が、実によく似合う。花も、似合う。おまえは、美しいんだよ。

高村、退場。

琴江はじっと沈黙。そして、ぽつりと夫の口真似。

妻 ……着物が、実によく似合う。花も、似合う。おまえは、美しいんだよ。（突然立ち上がって）なにを云ってるの！ あの男があんたのやとったにせものだってことぐらい私が見抜けないと思ってるの甘く見るなって！

— 暗転 —

五 〈二階の部屋〉

ノックの音。はじめは低く、すぐに異常に高くなる。
“男”があかりをつけ、戸口へ。

男 ……どなた？

夫 高村です。

高村、登場。男は棒立ち。三たび、沈黙の一瞬。

夫 ……きみは、誰です？

男 穴山小太郎。

夫 ちがう！ 絶対にちがう！

男 穴山小太郎というひとと間違えられた男……と云うつもりだったんです。

夫 間違えられた？ ……誰に？

男 女中さん。リカさんです。でもリカさんに罪はありません。私は間違えられたままにしていました。そして奥さんに会いました。穴山小太郎として夕食を御馳走になりました。

夫 何のために。

男 わかりません。逃げるチャンスを失ってしまったんです。いや、逃げるということをしなかったんで

す。

夫 逃げる……？ ……するときみは、

男 通称、空巢です。いずれはこうなることがわかっていました。警察に電話するなり、それが面倒なら私をほうり出すなりしてください。居直るなんてことはいたしません。

夫 わからんね。信じられん。

男 何がですか。

夫 きみが逃げも居直りもしなかったということがだよ。

男 それは、私自身もうまく説明できないんです。唯、こういうことは云えます。すばらしく、魅力的だったんです。抗しがたい魅力があったんです。

夫 ……なにが。

男 自分じゃアない人間になり、自分のものじゃアない雰囲気にとひたるということ。芝居をするってことは何てすばらしいんでしょう。

夫 ……きみはいったい、どんな利益を見こんだんだい。

男 利益!?

夫 穴山小太郎氏になりすますことによって得られる利益だよ。

男 私は穴山小太郎というひとが何者なのか全く知りません。利益どころか、最高七年の懲役という危険を担保として夕方から今までの短い時間を、

夫 それで、今でも満足なのかねきみは。私に見破られた今でも。

男 あなたは、実に冷静な方のようにです。少なくとも私を怖がってはいない。

夫 それがどうした。

男 ついでに私を理解してください。

夫 理解……？

男 私になぜリカさん突きとばして逃げなかったか、それを。

夫 突きとばせば強盗になる。きみは用心深かっただけだ。

男 突きとばさなくても逃げるチャンスはあつたんです。

夫 じゃア、なぜ逃げなかった。

男 ですから、それを。

夫 泥棒の気持を理解する義務なんかない。

男 泥棒の気持じゃない。人間の気持です。私という人間の気持です。

夫 人間、だって……？

男 ちがいますか。

夫 ……私にわかることは、きみはすこしおかしい人間だつてことだよ。人間としてもおかしいし、泥棒としてみてもおかしい。近頃は、きみたちのような、つまり昔ながらの空巢やこそ泥の社会にもちゃんとした秩序がなくなっているのかね。

男 さあ、それは……

夫 (男の着ていた上着をとって) これは、私の背広じゃないか。

男 はあ。ぴったりだったもんですから。かなり古いもんですね。あなたがまだやせていた頃の。だから奥さんも気がつかなかった……

夫 図に乗るんじゃない！

そこへノックの音。二人とも緊張する。

妻 ごめんください。……何か、お夜食の用意をいたしましたでしょうか？ それとも、お酒……

夫 ……いや。いいよ。

妻 そうですか。……では、ご用がございましたらそうおっしゃってください。リカさんはやすませましたけど、わたくしはまだ起きてますから。

夫 うむ。

妻 どうもおじやまいたしました。失礼します。（退場）

男 ……（ほっとしながらも、不思議そうに高村を見ている）

夫 （感嘆して）あんな女房を見るのは、はじめてだ。……実につつましい。実に普通だ。これはきみ、実に普通でないことだよ。

男 ……

夫 きみの前では、はじめからああだったのかい。

男 ええ。

夫 あんな感じだったのかい？ ずうっと。

男 ……ええ。

夫 （男をじっと見据えて）きみの、本当の名前は？

男 赤沢伸吉と申します。

夫 (男のまわりを廻りはじめて) ……夜食をたのおかね? それとも酒にするかい。

男 ……

夫 家族は? 家族はいるの、きみ。

男 いません。

夫 きみの消息が不明になっても、気にする人間はいない。そう思っていないんだね?

男 ええ。

夫 ……いいかい、きみ。これから私の云うことを素直に聞いて欲しい。

男 ……

夫 眞実は、私だけが知っている。その私がきみに協力すれば、きみはいつまでも穴山小太郎になりすますことができる。つまり私にとってもきみにとっても魅力的な契約のサンプルがひとつ、ここにある。

男 ……あくまで穴山小太郎氏に、なりませと。

夫 命令じゃない。契約だよ。自分ではない人間になり自分のものではない雰囲気にはたるとい希望を、きみは私に信託する。きみは自分の希望を保証されるかわりに、ほぼ完全なかたちで私に従属する。そういう契約だよ。

男 ……

夫 当分の間、法律をおかさずに、しかも安楽な生活を送れるというだけでも、きみにとっては有利な契約だと思っけどね。……どうだい、赤沢君。……そんな難しい顔をすることはないよ。自分でえらんだ道そのまま歩きつづければいいんだよ。

男 ……………

夫 きみは穴山小太郎だ。……穴山小太郎。今更私が催眠術をかける必要はあるまい。きみには自分自身をだましようという能力がある。そうなんだろう。芝居をするのはすばらしいと云ったじゃないか。

男 あなたにとって、この家にとって、穴山小太郎氏とはいったい何なんです。

夫 その本当の意義を、私もたった今知ったところさ。……私はね、穴山小太郎氏が長期にわたってわが家に滞在するということによって、わが家に秩序をもたらそうとした。そのために穴山小太郎という人間を一人、用意した。私は、その男の演技力と私に対する忠誠心に不安を抱いていた。しかし今は、私にとっておあつらえむきの、予想もなかったような事態がひらけたんだよ。試みというのは、ほんとにやってみるもんだね。今の私は、希望で胸がいっぱいだ。きみは、私のために空から降ってきた天使だ。何と自然にきみは出現したのか。きみなら、絶対だ。きつとできる。

男 ……………

夫 しかしね、私はきみを通じて家族を支配しようと思ってるんじゃない。すべては、家族への愛から出てくるんだよ。私は妻や子供たちを愛さずにはいられない。わが家の平和と団欒を夢みずにはいられない。その夢はきっかけさえあれば実現できる。穴山小太郎氏という象徴のもとに、われわれが一旦秩序を保てば、やがてその秩序が本物になる。そうだよ。私はこころみたいんだ。はじめはにせの秩序でもやがては本物になる。きつと本物になるよ。

男 ……そんな問題があるお宅とは、つゆほども、

夫 どここのうちにだって問題はあつ。放っておくかおかないかの違いがあるだけさ。私はもっと進歩したいんだよ、全体として。

男 ……しかし、私にとって魅力的なのは、たとえ束の間でも、完全なる穴山小太郎になり、完全にこの家におちつくことだったんです。その状態はもう終ってしまった。

夫 そう。そのとおりだ。しかしきみ自身も進歩すべきなんだよ。危険な賭けから、確実な契約へ。泥棒からサラリーマンへ。

男 あなたの進歩のほうが歩がいい。混乱から秩序へ。にせものから本物へ。不公平ですよ。

夫 不公平？ そんなことを云う資格があるのかい。きみは、つかまった空巢だ。私の捕虜なんだよ。

男 捕虜……？

夫 脱走は可能だ。しかし、どこへ脱走する？ 何不自由なく飼われている犬は、くさりにつながれていなくても自分から逃げ出したりはしない。

男 犬……。犬になれというんですか？

夫 おちつきなさい。……私は昔、純血種のスコッチ・コリーを飼っていたことがある。そのコリーの優美さ、上品さ、そして賢さ。私はそのコリーを見ているうちにね、問題なのは犬か人間かということではなくて、賢いか賢くないか、上品か上品でないかということだと思っただよ。そうじゃないかね、きみ。……人間。この言葉自体には何の意味もありはしない。人間、そう云っただけで何かの美しいイメージを抱くのは、それこそ人間特有の幻想だよ。イリュージョンだよ。スコッチ・コリーにもあり、人間にもある美しさ、上品さ、優しさ、それこそが問題なんだ。

男 ……

夫 きみは、自分が捕虜であろうと犬であろうと、そんなことを気にする必要はない。自分のおかれた状況より、自分がどんな人間になり得るかをかんがえればいいんだよ。いいかい？ きみにとっての問題は、

犬か人間かということじゃない。賢いか賢くないか、上等か下等かということさ。その可能性のなかにきみの自由というものがある。これが真理さ。

男 ……あなたは、間違ってる。

夫 どこが？

男 ……

夫 それは云えまい。きみには正当な立場なんでもないんだからね。はじめから間違ってるんだからね。きみは。……どうだい。契約を結ぶかい。それとも、逃げるかい。……契約を結んだとしても、きみはほとんど何にもしなくていいんだよ。唯私の家族をじっと観察していればいいんだよ。

男 観察……

夫 そう。観察。傍観。そこにいること。楽な仕事さ。

男 楽なことは知ってます。しかし、その観察の目的は、

夫 きみには目的などいらん。目的は私が持つ。主体性は私が持つ。

男 じゃア、私にあるものは何です。

夫 安全で、保障された生活。

男 安全で保障された……

夫 大事なことだと思うよ。きみにとって。

男 ……考えさせていただけますか。あしたまで。

夫 今夜われわれが寝静まってから、一仕事して逃げるというのも一種のやり方だ。しかし、きみはそんな馬鹿じゃあるまい。……（男のカバンをとり、中の品物を自分のポケットにおさめて）私のものは私のと

ころへ、女房のものは女房のところへ戻しておく。……じゃ、期待してるよ。……おやすみ。(退場)

呆然として立っている男。

男 ……契約。安全で保証された生活。目的のない観察。唯、そこにいること。(二、三步動き、また突立って) ……犬と、人間。可能性の中の自由。

またノックの音。男がだまって聞いていると、音は次第に高くなる。たまりかねて耳をふさぐと、部屋は闇となり、音も消える。

そして闇が去ると、部屋の中に琴江が立っている。

妻 おやすみのところを申しわけございません。……おじやましてよろしゅうございますか？
男 ……

琴江は、返事を待たずに腰をかけ、しばらく無言。

男は、言葉にも動作にも窮して、愚にもつかぬことを口走る。

男 今夜は、いたって静かでその……。そうそう、舌平目という魚は実に、
妻 穴山さま。

男 ……は？

妻 わたくし、とうていお芝居などできはいたしません。ありのままのわたくしを、これから、どうぞ存分にごらんになってくださいまし。

男 ……な、なんのことです。

妻 と申し上げてもわたくし、はじめからあきらめているのではございませんの。いいえ。むしろ自信を持ってそう申し上げておりますの。……わたくし、表面はどうであれ、また、うわべの行動がどうであれ、真実、夫を愛しております。それが、そのわたくしの心が穴山さまに必ずおわかりになっていただけはずだと、そういう自信を持ってありのままに振舞わせていただく決心をいたしました。

男 ……

妻 恥ずかしいことですが、ついさきほどまではわたくし、主人にいわれるままに、穴山さまの前でうわべをとりつくり、極めて普通の家庭の主婦の役を演じてまいりました。けれど、もうわたくし、そんな恥知らずなおこないは、決まっていたしません。どうか信じてくださいましな穴山さま。もともと、わたくしがこんな風に、ありのままの自分に戻ろうと決心いたしましたのは、あなたが私をお見つけになるそのお眼の光が真直ぐにわたくしの心臓をつらぬき、すべてのいつわりの気持を追いはらってしまわれたからなのです。……わたくしは、いわゆる悪い妻、悪い母でございます。でも、わたくしはわたくしの心の秩序にしたがってまさにそうなのです。だいいち、この家庭を愛し夫を愛し子供たちを愛していなければ、こんなことをくどくど申し上げにまいったりはいたしません。お芝居はやめたとしおらしく云うことがつまりお芝居なのだそうおとりになったりしてはくださいますな。わたくし、精一杯なのです。

男 ……

妻 ……高村は、今夜のわたくしに、わたくしのお芝居に満足しております。あなたという方をまだよく存じ上げず、あなたという方を甘く見ているからですわ。でもわたくしはすぐにわかりました。あなたをだますことは不可能だって。そう直観した途端に、わたくし、一刻も早くあなたにすべてのことを告白したくなってまいりました。穴山さま。わたくしがこれから申し上げることは、みんな、本当のことです。唯、それを常識の鏡にお照らしになることだけはおやめになってくださいまし。……まず、わたくしがはじめて夫以外の人間とまじわりを結びましたのは、忘れもいたしません、八年前のちょうど今頃の季節でございました。……雨が、雨が降っていました。子供たちは、湖へ行き、高村は、ロンドンに、出張しております。

武満徹の「ノヴェンバー・ステップス」。

琴江はゆるやかに舞台をまわる。

妻 ……よるが、天鷲絨のように私をつつみ、そこへ手が、螺旋のような手が、私のうちがわへ、うちがわへ……

琴江、静かに崩れるように、床にうずくまる。

妻 ……そして、闇が、闇が捻子のように、うちがわへ、私のうちがわへ、うちがわへ……

琴江、さらに深くうづくまり、ついには顔を床にふせる。

サパテアードの音がかすかに入ってきて、次第にたかまる。琴江は身を起し、ゆるやかに身を
かきむしる。

サパテアードの音は、しめつけるように果てしなくつづき、琴江は髪をふり乱して、ひたいか
らは玉の汗。それが胸に落ちて行く。

男も、琴江を見つめているうちに汗をにじませ、やがて耐えられなくなって声を振りしぼる。

男 奥さん！ ……やめてください。私は、私は穴山小太郎じゃありません！

この時、サパテアードがおわる。

男 (あえぎながら) ……ご主人のおっしゃることは、いわば経済、いわば道徳、いわば契約。よくわから
ないながらも何とか……。しかし、奥さんのおっしゃることは、わかるといえばわかりすぎるほど……。
けれどそれだけに意味が、私に今云うことの意味が……、まるで。

妻 …… (身じまいをなおし、男を見つめる)

男 ……わたくし、本名、赤沢伸吉。生まれは、

妻 なんてこった。

男 ……

妻 頑張りの足りないのにも、ほどがあるわよ、あなた。

男 は……？

妻 来たその日にもう正体をあかしてしまっなんて、辛抱が足りないのにもほどがあるわよあなた。

男 ………

妻 いくら人手が足りないとはいいながら、こんなに節操のない人をやっなんて、

男 ………

妻 でも……、犬は飼主によって変わるものね？

男 は……？

妻 そうなんだわ。あなたは唯、無節操によって高村を裏切ったわけではないんだわ。

男 ………

妻 その目。……はじめからわかっていたわ。あなたは、私には誠をつくせる。私のことは裏切らない。そうね？

男 私は……

妻 私を見るなりあなたの心のなかに起きた欲望。それはかなえてあげます。そのほかのものも、できるだけご希望にそうようにしましょう。……私がおねがいたいのね、高村の、ある秘密について、そのすべてを私に知らせるといふこと、それだけなの。……多分、あの、ゼラニウムの鉢でテラスを飾った、あのうちだという見当は……。でも、唯の嫉妬ではないのよ。高村の魂を救いたいという、私のやみがない気持ちがあなにおねがいするんです。私は、夫を愛しています。さっき申し上げたことはみんな本当なのよ。

男 ………残念ですが、私は。

妻 (男に抱きついて) 私をお抱きなさい。今すぐに。……さあ。

男 ご主人を愛しておられるなら、なぜ貞操を……

妻 貞操? ……いつあなたに貞操をさしあげると申しました? あなたにさしあげるのは、唯私の……

男 いりません。何であろうととにかく、いりませんよ私は。

妻 そう。……じゃア、かえしてちょうだい。

男 かえせ……?

妻 あなたが今日、私を見つめた、その視線が盗んだものをそっくりそのままかえしてちょうだい。

男 なにを、なにをかえせと、

妻 私の、セックス。

男 セックス?

妻 あなたが盗んだ私のセックス。

男 あなたのセックスなんぞ盗みやしない。

妻 盗みました。

男 そりゃいくらかは、そういうことを想像はしましたよ。しかし、

妻 想像力はエネルギーです! あなたが思うこと想像すること、私が想像すること、みんな、たしかに実在です。エネルギーです。

男 それはそうかも知れませんが。しかし、実際には、いいですか、実際には、私は何にもあなたをおかしちやいない。何にも盗んでやしない。盗んだのは……

妻 盗んだのは、なに?

男 でもそれは、もう返しました。

妻 返したって……、誰に？

男 ご主人にです。(ポケットから指環を出して琴江にわたし) これも、お返しします。それで全部です。本当です。

妻 …………… (指環を見つめる)

男 私は、ご主人が予定された人物ではないんです。…………今日おたくへ、ちようど仕事にきた、空巢です。なぜ今まで、ということはおもう繰返したくありません。ご主人にきいてください。お二人でどうぞ笑ってください。笑ったあとで喧嘩をしようと仲良くしようと、それはもう私の知ったことでは…………

妻 待って！ あなたは、空巢…………

男 そうです。間違えられ、居すわり、そして今、契約をせまられている空巢です。

妻 ……そうなの。そうだったの。

男 ……………

妻 でも、わかる？ ……あたし、ちつともおどろいていないわ。それどころか、あなたが私のために天から降ってきた天使のような気がする。

男 おんなじことをおっしゃいましたご主人も。

妻 主人のはもう無効。私がすべてを知ってしまった以上、あなたはもう高村の忠実な僕になることは不可能よ。でも、私とはまだ契約ができる。…………ここに、うちにいてちようだい。あたしのために。あなたがほんとうの空巢なら、そうよ、あのゼラニウムの家に、忍びこむことだって出来るわ。何て都合がいいんでしよう。

男 奥さん……

妻 ありがとう。告白してくれて。

男 しかし、

妻 (男の口をふさぎ、キッス)

男 ……………

妻 ……(やっと離れて)じゃア、おやすみなさい、あたしの天使。……あなたは今夜、私を抱いて寝るのよ。ベッドに私のからだだが、在っても無くても。

琴江、静かに消える。

男、たかぶる気持のままに、独白。

男 高村夫人の言葉にしたがえば、私の想像力のエネルギーではとてもこの家の実相をつかみきれぬ、エネルギーがあったとてつかみたいとも思わぬ。……当然私は心をきめました。逃げることに。いや、私のいるべきでない場所をすみやかに去り私のいるべき場所へ戻ることに一刻も早く!

— 暗転 —

六 〈サンルーム〉

カバンを持って立ちすくんでいる男。
その両側に順と夏江。

男 空からになったカバンのように私の中身をも空にすべくこころみた真夜中の遁走。しかし、真夜中というの
は逃げて行くよりもかえってくるのにふさわしい時間だということを私は忘れていました。……お互い、
知らぬ顔であるその故に、知らぬ顔してすれちがうこともできず、おや、どなた、実は、ということにな
り、私はすべてをこの二人にぶちまけました。口の軽くなった酔っぱらいのように、あるいはまた、酔っ
ぱらったような口の軽さで、……ざまあ見やがれと。

順と夏江、感嘆したような反応を示して、男をかこんでまわりはじめる。

男 ……私はね、逃げたいと思うんだよ。囲みを破って。

息子 なぜ？

男 ……なぜ？

娘 そうよ。なぜ逃げるのなぜ逃げなければならぬのせつかくの囲みを。

男 せつかくの……？

息子 おあつらえの。

男 ……………

息子 わからないの？ 恵まれた上にまた恵まれているんだよあなたは。

娘 かんがえてみるとあたしうちのなかであんたのような存在になりたいと思ってたんだわ潜在意識的にきつと。

男 ……………

娘 パパのためにママをだましママのためにパパをだまし自分のために自分をだます。完全だわア。

男 完全にその仕事を遂行するってことは、自分をハッ裂きにするってことなんだよわからないの？

息子 ハッ裂きがハッ裂きのままに生きられるという幸運、わからないの？

娘 あこがれちゃうあたし。抱きしめたいあたし。

息子 離さないよ。決して。

娘 うちにいて！

男 (二人に抱きつかれて) なにをする…………。

娘 (離さずに) 穴山さん。

息子 赤沢さん。

娘 小太郎さん。

息子 伸吉さん。

男 お巡りさん！ ……私を解放してくれ。お………… (二人に口をふさがれる)

リカが出てくる。とりつくろう三人。

男 手を……？

娘 そうよ。手を。（順と一緒に手をさしのべる）

男 ……………（気味悪そうに、二人の手を見る）

息子 あんたこそ、珍しい動物かなんかのようにぼくらを見ないでほしいな。

男 見ちゃアいない。

娘 見て！

男 ……見てる。

娘 じゃア、手を……。

男 ……………

息子 手が、ないの？

男 あることはある。

娘 じゃア、その手を……

男 ……………（思わず自分の手を見る）

息子 自分の手を見ちゃアいけない！

男 自分の勝手だ。

沈黙。

娘 あなたは、自分の手しきや、見ないの？ 誰もいないところでなくちゃ生きられないの？ 空巢狙いっ

ていうのは、そうなの？

息子 勇気を出せよ、空巢さん。

男 (目をむいて) 勇気？ 何のための!?

息子 人間とつながるための。

娘 人間をだますための。

男 ……人間？

息子 人間という言葉が適当でなければ、動物……。

娘 生きもの。

息子 生きものも適当でないなら、

娘 何か……。サムスイング。

息子 ぼくたちは、ここにいるんだよ。ここに！

娘 ここに！

男 そう。きみたちは、ここにただだ。唯のサムスイング。有害でも無害でもない人間大の黴菌！

娘 ……ねえ、いて。ここにいて。

息子 ここに。

男 ……いたい、と思った。でももうだめだ。

娘 なぜ？

息子 なぜ!?

男 私のこのうちでの黄金時代は、もう終ってしまったんだよ。

息子 そんなことは、

男 いや、そうだ。

娘 これからはじまるのよ。

男 いや。何にももうはじまらない。はじまるとすれば、……歪んだくりかえし。それだけだ。

息子 歪んだくりかえし……？

男 きみたちもやめるがいい。しよせんみんな、歪んだくりかえしだ。意味が、意味がなさすぎる。

息子 あんたには見えない意味がある。

娘 あなたはあなたの意味を、何かきつとここで、見つけることができるわ。

男 ……信じない。

息子 信じてごらん。おれたちを。

娘 あたしたちを。

男 きみたちは、親とどこがちがう。

息子 ちがう。まるつきり。

娘 絶対的に。

息子 おやじは穴をふさぐのに、ふさぐ材料をえらばない。おれたちは、

娘 穴をあけるのにあける道具をえらばない。

息子 でもおれたちは、同じ穴のムジナじゃアない！

娘 (行こうとする男にすがって) 待って！

男 ……私はね、律儀なんだよ。(きよとんとする二人に) 律儀なんだよ私は。

息子 リチギ……………？

男 そう。……………習性でね。働く者の。

娘 ……（反芻して）リチギ。

男 高村氏のたのみは何とかなっても、高村夫人は高村氏の秘密をさぐれとおっしゃる。それができない。
できそうもない。

息子 なあんだ。そんなことで……………

娘 そんなことは……………、私たちがひきうけるわよ。

男 きみたちが？

息子 テラスをゼラニウムの鉢で飾った、すぐ近所のうち。……………レポートを書くよぼくが。

男 ゼラニウム……………？

息子 ゼラニウムは花さ。一年中花が咲く。真赤な花さ。

娘 高村氏から高村夫人の秘密をさぐれときたら、それもひきうけるわよ。

息子 リチギに。

娘 そう。リチギに。

男 ……

息子 これで解決。手打ちだ。

娘 さあ。お部屋へ……………

二人が両側から男を支え、歩き出すが、男はすぐに二人を突きはなす。

男 ……やっぱり、いやだ。私はいやだ！

娘 ……やっぱり、勇気がないんだわ。

息子 好奇心もない。

娘 生きてないんだわ。

男 私は、私はね、勇気をもって今日行動したんだよ。勇気と、好奇心と、生きるという期待と。こんなこ

とは、はじめてだ。

娘 じゃア、つづけたらいいのに。

息子 もうすこし、つづけたらいいのに。

娘 行きつくところまでさ。

息子 もうすこし、行ったらいいのに。

娘 まだ先がありそうだと思わない？

息子 もうすこし、先が。

娘 人間、なんて云ってないでさ。

息子 もうすこし、……さ。

娘 (男の手をとって) 手をさ、

息子 (男の首を動かして) 眼をさ、

娘 (男の耳をひっぱって) 耳をさ。

このとき、尺八の音がきこえてくる。

娘 ……ママだわ。聞いたことのないレコード。

息子 ……本当に演奏してるのかも知れない。

娘 まさか。尺八よ。

息子 そう。本当の尺八だ。

男、尺八の音に魅入られたように立ちすくむ。虚空にひびく尺八の音は、男にこの家のあらたな“奥”を暗示せしめ、順と夏江には、ひとつの“底”をつきつけてやまない。

男 (尺八の音にしばらく出されるように) まだ先が、先がありそうだと。

息子 …… (小さくうなづく)

男 わかったよ。…もうすこし、いてみる。

男、静々と退場。——沈黙。

娘 ……ほんとうに、珍しい動物。

息子 本来は、珍しくはない。珍しいもんにしちまったのは、おやじとおふくろさ。

尺八はひびきつづけ、舞台はへ三つの部屋へになって、順と夏江は自分の囲いの中に入る。そしてもう一つの囲い——高村と琴江の寢室が、幻想の照明の中にあられ、からみ合っている二人の姿がそこに浮かぶ。静止している順と夏江も動いている高村と琴江も、尺八の音に呪縛され、“音に化した闇”のような尺八のひびきにつつまれる。やがて夏江が、その闇におびえたように声を発する。

娘 あたし、もう、いやになったみたい。うちを出ようかな。

息子 あわてることはない。……見とどけるんだよ、最後まで。

順はそう云ったものの、必ずしも凜とした云い方ではない。

暗転。

尺八の音のみがのこる。

第二幕

一 〈サンルーム〉

明るい朝。

男がゆったりと坐って本を読んでいる。すぐその本を投げ出しパイプを手にとるが、すぐにパイプを投げ出し、巻煙草を手にとる。そして最初とちがう本をとりあげるが、すぐにそれも投げ出してしまふ。しかし、ものぐさな様子や倦怠感はない。一種の場ちがいな感じが、見かけの動作に反した生気を彼にあたえている。そこへリカが、電気掃除器をもって登場。

女中 おじゃまします。

男 ……どうぞ。

リカ、掃除をはじめ。

男 (リカをじっと見ているうち) ……きみは、電気掃除器を口に当ててみたことあるかい。

女中 は……………？

男 こうやってスイッチを入れるとね、心臓を吸いとられるような、いやアな気持ちになる。もし、掃除器の力をどんどん大きくしたら、本当に心臓や胃や腸がぞろぞろ吸い出されてくるだろうね。

女中 気持が悪い……………

男 そういう強いやつをお尻に当てたら、尻の穴からいろんな臓物が、

女中 (笑い顔だが) いやだわ……………。なぜそんなお話をなさるんですか？

男 そんな風なこと、考えたことないかい。

女中 べつに。

男 ……それじゃア、もうひとつ。

女中 ………………

男 ……私の子供の頃の友達に、赤沢伸吉っていうやつがいてね。

女中 ………………？

男 本屋の息子だったんだよ、ちっぽけな。小学生の頃から配達と集金をやらされて……………。ほら、今でもあ
るだろ。主婦之友とか婦人倶楽部とか。毎月あれが出る日は大変でね、自転車にステープル・ファイバー
のカゴをのっけて、そこに雑誌を山のように積んで、急坂をえっちら昇って行くんだよ。こんちわ！三
陽堂ですが主婦之友をもってまいりました。あら、坊や。いつもお利口さんね。これ、おあがりなさい。
……………白い紙にアメ玉。奥さんは真白に厚化粧。……………この赤沢伸吉、変なくせがあつてね。どんなごたいそ

うなうちでも台所からはいらずに、必ず正面玄関から入って行くんだよ。……今度からは、勝手口からきてちようだいね。ハイ。……けれども次のときもまた、門を入れて玄関の呼鈴を鳴らす。ピアノかなんかが奥からきこえて、あとはしいーんと静まりかえってるよううち。……本当は、大した金持じゃアなかつたんだろうねえ。

女中 ……………

男 その、本屋の息子の赤沢伸吉がね、どういいうわけか本屋にもサラリーマンにもならず、

女中 何になったんですか？

男 何になったと思う？

女中 さあ。……出世したんですか？

男 いや。

女中 何かの職人さんにでも、

男 そう。職人といや、職人だが、

女中 でも、そのひとがいったい、どうしたんですか？

男 つまりさ、今、ぶらぶらと……

女中 (腕時計を見て) あら、もうこんな時間だわ。お二階のお掃除をしないと、

男 (急に不機嫌になって) 二階はきれいだよ。

女中 でも、一日に一度は。

男 一日に一度は？

女中 ええ。

男 そんなこと云ってほしくないな。

女中 でも私は女中ですから。

男 そう。きみは女中だ。電気掃除器じゃアない。だから一日に一度なんて云い方、してもらいたくないんだよ。

女中 ……おはなしが、難しくて。

男 難しい？

女中 小太郎さまのおっしゃることに、きっと意味がおりになるんですね。

男 意味なんかないよ。

女中 そうなんです。ないも同然なんです私には。

男 そう云われちゃミもフタもない。

女中 すみません。

男 ……きみと二人きりになると、妙におちつかなくてね。…なぜだろう。

女中 小太郎さまは唯、私をからかっていらっしやるんです。

男 からかってなんかいないよ！ ……すまない。孤独なんだねぼくは。つい、どなる。

女中 王様というのは、孤独なんですよね。

男 王様……？

女中 小太郎さまはこのおうちの王様ですから。

男 なるほど。そういう見方もある。…この王様、実は何度も逃げ出そうと思った。その度に思い出すんだよ。あんたには勇気がないのかって云われたことを。…あれは全く、タチの悪い挑発だった。しか

し、あのとき私は、あの二人じゃなく、誰かほかの人間に云われたように感じたんだよ。本当に手をさしのべたのは、誰だったんだろうね。……え？ リカさん。

女中 ……………（気味悪がって後じさりする）

男 いやア、すまない。今度はひとりごとを、ひとりごとじゃなく云っちゃった。……手をさしのべられたという思いは、そう、もはや思い出にすぎない。今気がついたことは、勇気ってもののつかい方が、ほかにもあるってことだ。掃除をしたまえリカさん。

女中 ……………

男 汚れていなかったら、ゴミをぶちまけてそいつをまた掃除器に戻せばいい。何かしてりやいいんだろう
きみは。何かしてりや。

女中 それは、あんまりです。これでもわたし、結構忙しいんです。……失礼します。

男 ……………リカさん。

リカ、退場。

男 ……心にもなくリカさんを傷つけた私は、心のなかでリカさんにあやまりました。あれ以来私は、リカさんと二人きりになると、苦しくて、それでいて楽で、楽でいながら苦しい、そういう変な気分になるんです。自分で自分の胸をさすりながらげろを吐くときのような。

尺八の音が流れ、舞台は〈サンルーム〉から〈三つの部屋〉へ変っていく。

男 ……ところで、私は今、いたって賢く上品な犬となって、立派な犬小屋に住んでいます。……犬小屋からの眺め。……人間小屋のほうはその後どうなったか、まあ、ごらんください。

暗転。尺八の音がのこる。

二 へ三つの部屋とサンルーム

尺八の音が流れつづけて、

その音を聴きながら、剃刀でひげを剃っている順。

自分の囲いの中で何か物を探している夏江。

琴江は、鏡の前で髪を梳っている。

髪の毛は漆黒で、異常に長い。

高村が登場。

上機嫌と余裕綽々をよそおっているが、しゃべっているうちにあせり出す。

夫 みんな……、どうしたんだい、いったい。まさかシンから穴山さんを畏れているわけじゃないんだろ

う？ あれからまあ、ひっそりかんと、かえって逆効果じゃないかね？（息子に）たとえばあの、尺八だ。静かすぎやしないかねあれは。狂わんばかりの静けさ。そうなんだよ。狂わんばかりでほんとうに狂うってことがない。開放感がない。中途半端だ。いや、極端すぎるんだよ。いくら聞いても耳に慣れるってことがないんだよ。（娘に）おまえもそうだ。一日中部屋の整理ばかりしてる。（妻に）おまえは、髪の毛が長すぎる。かつらにしてもとにかく本物の髪の毛だ。そんなに長いやつは十二単としかマツチせんのだよ。おまけに、際限もなくおまえは梳る。梳る。一日中！

順は剃刀をおき、夏江は動きをとめ、琴江は櫛をおく。尺八がやむ。

夫 （琴江に近づいて）おまえは、よくやってくれてると思うよ、穴山さんの前では。しかし、おれが本当に希んでいるのは芝居じゃアない。芝居は手がかりにすぎんだよ。あれ以来、たしかに秩序はできた。みんな、礼儀ただし。冷蔵庫の中の冷凍食品のように礼儀たたく、いらだたい！ 温度をすこしさまそうとしたら、いきなり凍っちまったんだよおまえたちは。

妻 ……まだ、凍ってはいません。絶対温度が零度にならない限り、私は凍らない。

夫 絶対温度……？

妻 温度計の物質の、個性によらない温度。

娘 絶対零度は、マイナス二百七十三度。

息子 絶対温度五度以下の極低温が地球上で実現されたのは近々二十世紀にはいつてからのことであるが、この温度領域では、物質を構成している原子の熱運動がほとんどなくなるため、常温では決して起らない

興味ある現象があらわれる。

娘 すなわち極低温の世界では、現象の本質が、なまに、あくまでもなまにあらわれ、その機構が純粹にと
らえられる。

息子 しかし、極低温における物質の不思議な現象が発見されてからすでに久しいのに、まだその本質が明
らかにされていない。これは、物質の現象があくまでもなまにあらわれるため、かえって理論の完成を難
しくしていることによるものである。

妻 そのとおりね。

夫 私は……、喩え話をしているんじゃない！ 何かに喩えなくちゃとても今の気持ちを云えないってこと
は事実だ。しかし、私が云いたいことってというのは、喩え話じゃアもうすまないってこと、そのことなん
だよまさに！

妻 （かつらをむしりとり）まさにそうよ！

夫 ……………

妻 ……あたしの今の気持は、喩え話でもなければとても云えない。でもあれは、喩え話じゃアなかった。

……事実。まさに事実。

夫 なんの事だ。なにを云ってるんだいおまえは。

妻 ゼラニウムが好きなのは……、あのおばあさんではなく、あのひとだったのね。

夫 あのひと？

妻 ……あのひとが死んでも、ゼラニウムは咲きつづけて、おばあさんはお水をやる。あのひとが死んで
も、お葬式は出さずに、おばあさんは、あなたを迎える。

夫 ……………

妻 あのひとが死んでも、ゼラニウムは死なない。あのひとのからだは死なない。……それを、あなたが抱く。死体を。死体を！

夫 なにを云ってるんだおまえは！

妻 見たのよ！ 見たひとがいるのよ！ ……死体を。あのひとを。ゼラニウムを。死体を。あなたを、ゼラニウムを。抱くのを。死体を、抱くのを。

夫 琴江！

妻 ……喩え話ではないということを、あなたは知っている。

夫 ……いい加減に、冗談はやめなさい。ほんとに、凍りつくみたいな感じだ。

妻 その感じを、本当に知っているのよねえあなたは。それとも、抱くときは、あたためるの？ 何かで。

夫 ……………

妻 ……今さら、何をこわがるの？ ……あたしの、復讐？ 憎しみ？ ……どうしようかしら、あたし。

夫 おまえは、不眠症にかかってるんだよ。

妻 あのひと、死んだのはいつなの？ あなたが殺したの？

夫 ……………

妻 せめて本当のことを云って！ ……どんなことがあっても、私の神経は狂いはしません。狂わんばりの

気持が永久につづいても、狂うということはないのよ。……だから、本当のことを云って。

夫 ……おれには、おまえの云っていることが、わからないんだよ。

妻 まだそんな……

夫 冗談なんだろう？ ……え？ 琴江。

妻 見たひとがいるのよ。死体を。あなたを。

夫 ……死体を、おれを、誰が!?

妻 穴山さんが。

夫 ……

妻 赤沢さんが…、見たのよ。

夫 ……赤沢。

妻 穴山。赤沢。…空巢。穴山。赤沢…。空巢。

凍ったように棒立ちになったままの高村。ふたたび尺八の音が流れ、高村と琴江の位置はそのまま、装置はへサンルームへに変わり、そこには、男が坐って、本を読み、パイプをくゆらせている。

妻 ……穴山さん。

男 (はっとして振り向き、いささかうろたえながら)…お早う、という時間ではもう、なかったですか
な。

妻 赤沢さん…

男 …… (思わずあとじさる)

妻 ……とうとうあたし、云ってしまったわ。あなたのお役目も、今日でもうおわりよ。

男 …………… (じつと正面を向いている高村を見る)

夫 (怒りをおさえ) いつ、いつ裏切った？

男 …………… (ゆっくりとそっぽを向く)

夫 まあいい。きみは、卑しい犬だ。言葉なんぞはいらない。唾をはきかければそれですむ！

妻 その前に！ ……お聞きなさい。(男に) さあ、話して。あの家であなが見たことを話して。

夫 私も許す。 ……云え。

男 テラスにゼラニウムのあるうちで ……、高村さんが死んだ女を抱いていたというあの話ですか。

夫 (とびかかって) なんのためにそんな嘘をついた？ ……え!?

妻 (夫を引き離して) 私の証人に手をふれないで！ ……さあ、話して。

男 ……………

妻 話して！

男 話します。 ……テラスにゼラニウムのあるうちでのお話です。 …… (だまる)

妻 早く。

男 奥の部屋には、場ちがいの、屋根つきの寝台があって、その上に女のからだかひとつ。病人かと思えば、そうではなく、蠟人形かと思えばそうではなく、どう見てもそれは死人。 ……そこへ、高村氏もまた横たわり、やがて死人の髪を、死人の肌を、愛撫しはじめ ……

夫 くだらん。くだらん！ なにがアイブだ。なにが死んだ女のからだをアイブだ。

男 アイブとは、いつくしみながら撫でるということ。

妻 (もだえて) ああ ……

夫 おまえが長々と理由なく冗談を云っているというこのほうをむしろおれは信じたいよ。そうでなければ、おまえがまるつきり陳腐な感覚をもった女だということを肯定しないわけにいかなくなるからね。屋根つきの寝台、死美人、その死体の肌をアイブ、アイブするおれ。……陳腐だよ。陳腐すぎる！

妻 ……事実は、事実なるがゆえに、陳腐な印象をとまなうものなのよ。どんなに珍しい、どんなに美しい、どんなにおそろしい事実も、それが本当の事実であれば陳腐という言葉からのがれられない……。あなたは私たちの秩序というもののために恩人の息子という嘘を、穴山小太郎というひとをつくり上げたわね？　なんて子供だましの陳腐なかんがえ。でも事実だった。あなたは真剣だった。そのことはあだし、決して怒れない。けれど、ゼラニウムのあるあのうちのことは……

夫 どこにそんなうちがあるんだ、どこに！（男を振り向き）嘘だと云え。陳腐な嘘だと。

男 ……嘘だと？

夫 そう。ゼラニウムも、死体も嘘だと。

男 ……

夫 云え！

男 云います。……ゼラニウムも死体も嘘です。

夫 もっと自分の言葉で、

男 自分の言葉とは……

夫 もっと本当らしく。嘘だということを本当らしく。

男 ……

夫 云え！

男 みんな……嘘です。

夫 まだまだ真実感がない！

妻 嘘ではないからよ。さあ、真実をこめて云ってみて。事実だって。

男 みんな……事実です。

妻 もっと本当らしく。本当だということを本当らしく！

男 ……………

妻 云って。

男 本当に、本当です。

妻 だめよ。真実感がない……

夫 嘘だからだ！

妻 ……………

夫 こういったやつなんだよこいつは。私はね、こいつのちよっと変った、個性的に見えるところをすこし
買いかぶりすぎてた。何のことはない、こいつはつまり、節操というものがひとつもない、まるつきりか
たちのないみたいな存在なんだよ。契約を結べる相手じゃなかったんだよ、そうとわかったら即刻関係を
絶つのが経済というもんだ。お互い、信用したり利用したりするのはもうよそうじゃないか。

妻 ……………（男をじっと見つめている）

夫 まだあきらめきれんのかい。

妻 ……私は、このひとを信じてこのひとの話を本当だと思ったわけではないわ。私が想像していたことと
このひとのおしえてくれたことがぴったりと一致したからこそ私は信じるのよ。

夫 一致した……？

妻 このひとに私とおんなじ想像力があると思って？ そんな馬鹿な。見たのよこのひとは。事実を。だからこそ、

夫 そんな事実ならおれのほうにだってある！

妻 ……………

夫 いいかい？ おまえはね、一日おきに外出するんだ。その目的は二人の男に会うことだ。一人はおまえの例のおこもりの相手ひげもじゃじい。もう一人はのっぺりの若もん！ 日本旅館でおまえはひげもじゃに会い、モーテルでおまえはのっぺりに会い、ひげもじゃには金を払ってのっぺりには金をもらう！ そんな事実をおれに信じろっていうのかい。冗談じゃない。一笑に附したよおれは。……この男はね、退屈しはじめたのさ。ちよつとふざけてみたくなったのさ。それだけのことだよ。

妻 ……………

夫 それとも、本当だとしても云うのか？ おまえの秘密。

妻 ……いいえ。

夫 じゃアおれのも嘘だ！

夫 いいえ！

この時、マイルス・デイヴスのフルーゲルホーンが鳴りひびき、ガーシュインの「ボーギーとベス」の中の一章がきこえてくる。

同時に、順が奇妙なワゴンを押して登場する。

ワゴンは屋根つきの寝台をかたどり、そこには死体に扮した夏江が花につつまれて眠っている。ワゴンの隅にはラッパ型のスピーカーが据えられて、そこから出てくるフルーゲルホーンは「祈り」という曲だが、神を脅迫しているような祈りではある。高村たち三人は、呆然としてワゴンに舞台をゆずらざるを得ない。ワゴンをしかるべき位置にとめ、おもむろにひざまずく順。

息子 ……ベス。…ベス！ ユー・イズ・マイ・ウーマン。ユーイズマイウーマン。ナウ！ ……けれどなア、ルック！ いざりなんだよおれは。おまえを探し、おまえを求め、場所という場所をうろついて、おれはいざりになった。そうしておまえは、おれを待ち、おれを求め、時という時をうろついて、死体になった。……どうだろうね！ おれがわかるかい！ おれだよ。高村だよ。

妻 ああ……（くずおれる）

娘 ……（かすかに首を動かす）

息子 ベス……（死体がまた動く）……オー、ベス！（と、立ち上がる）……や。おれの足がなおった。

いざりがなおった。ルック！ ……ベス、おれは立ってる。おまえは生きてる。……そうだ。ベス、言葉を。生きているなら、ベス、言葉を！

娘 ……わたしは、

息子 ああ……、言葉だ。生きている証拠、言葉だ。……次は？ わたしはの次は？

娘 わたしは……、死体です。

息子 うそうそ。生きているよ、動いているよ。

娘 動いている死体です。

息子 死体だっていうのは、おそらく錯覚だよ。

娘 動いているというのが錯覚なのです。(ワゴンから降りて歩く)

息子 それが、そうやって歩いているのが、錯覚？

娘 ええ。(歩きつづける)

息子 どこへ行くの。トイレかい。

娘 いいえ。そとへ。

息子 そとの、どこへ。

娘 旅館へ。

息子 え……？

娘 それから、モーターへ。

息子 ……ベス。

娘 (ゆっくりと振り向き) わたしの名は、高村琴江。

妻 ああ……

息子 ああ……。 (またいざりに戻ってしまう) ……今は、夢か？ ……おれはいざり。おまえは死体。
何でセラニウムってやつは一年中花が咲くんだ！

三 〈サンルーム〉

第二場のワゴンはそのまま残り、男がそこに坐っている。坐っているというより坐らされてい
る。順と夏江も、残された生徒然として坐っている。高村は懸命に威厳をつくり、充分に間を
おいて、やおら発言する。

夫 おまえたちは多分……、前衛演劇とやらの見過ぎなんだろうな。

息子 どういたしまして。

夫 まず、そんなところだ。

娘 あのひとは何の見過ぎかしら。空巢をつかまえて飼い馴らすというのは。

息子 人間がみんな道具にしか見えないんだよあのひとは。これは使える、これは使えない。これはどう
にか使える。これはどうにもこうにも使えない……。

夫 私にはきちんとした目的があった！ 現実的な目的が。

息子 こっちにだって目的はある。

夫 それならそれでもっと確かな道具を見つけてこい！おまえたちの使っている道具はもともとみんな、お
れが買ってやった道具だ。おれが買ってやったおもちゃだ。おもちゃにはおもちゃしかこわせはしない！

順が立ち上がると、そこへ琴江が放心したように登場。

妻 (順に) あんた……、ほんとうに見たの。死体を。

夫 まだおまえはそんな。幻想だ。嘘だ。

娘 ……現実。

息子 死体は見た。……見てる。

娘 ……現実。

夫 琴江……。もう一度、説明する。私はね、どんなことをしてもこの家にひとつの秩序を……。 (ふと、男が口のあたりに手をやるのが目にはいる。それが笑ったように見えて) にやにやするな! (すぐに三人のほうへ) ……おまえたちは結局、この男を楽しませてただけだ。こいつのために芝居をやってる。金を払って! (また男にせまって) ……おれをだまし、女房をだまし、自分をだまし、……。下劣すぎる。人間、失格だ!

男 はばかりさま。

夫 なに?

男 はばかりさまという言葉は、こういう時につかうもんです。

夫 (長い沈黙) ……居直った。……琴江。居直ったぞこいつは。

男、莊重にワゴンから降りる。

男を見つめる四人。

そこへ、あっけらかんとしたリカの声がとびこんでくる。

女中 ただいま！ どうもおそくなりました。

舞台の五人は、一瞬完全に静止する。

そしてリカがあらわれた瞬間、それぞれ急に自分をとりつくろう。

日常の時間が突然戻ってきたのである。

女中 (登場して) ……まあ、皆さんお集まりになって。すみません奥さま。映画を見てからちよっと買物をして、手間どってしまつて……

妻 ……いいのよ。今日はお休みなんだから。

夫 ……(ほっとする)

女中 あのう、恥ずかしいんですけど、鯛焼き、召上がりませんか？

妻 鯛焼き？

女中 ええ。いかがですか、穴山さん。

男 いただきましょう。

女中 穴山さんにおしえていただいた映画、やっぱりとても面白かったわ。

男 そうでしょう。あれは、泣かせるし、笑わせるし、その上、

女中 その上たためになるとおっしゃいましたけど、それはどういうところが？

男 いや。それはくだらないことで……

女中 あら。くだらないことだったら、ためにならないってことじゃないんですか？

男 いやいや。くだらないことでもくだらなくないことでも、ためになるということはやはりためになると、
いうことで、

妻 リカさん。穴山さまにお茶を。

女中 はい。

息子 ちよつと待って！

緊張する高村と琴江。

息子 ……おれにも、お茶を。

女中 もちろん皆さんにさしあげますわ。お紅茶がよろしいですね。

娘 リカさん！

女中 ……

娘 穴山さんはね、……レモン。あたしはミルク。

女中 はい。かしこまりました。(退場)

リカが出て行くと、当然、白けた空気が流れる。
誰もその空気を変えることが出来ない。

しかし、高村はさすがに中心人物、新しい状況を、感動的に、そして悟りをひらいたかのよう
に迎え、それを利用する。

夫 ……そうか。……そうか！（あらためて一同を見まわし、親しみをこめて男に）……穴山さん。

男 （冷たく）私は、赤沢です。

夫 いやいや、どういたしまして。

男 ……？

夫 きみは今、立派に演技をつづけた。リカの前で。（三人に）おまえたちもそうだ。最後のどたんばで、
見事に理性を発揮してくれた。感謝するよ。これでこそ私の家族だ。リカの前で、期せずして我々は今、
ひとつの場を共有したんだよ。

妻 とりあえず、お芝居をしただけよ。

夫 とりあえず、には違いない。しかし、そのとりあえずには全く新しい意味があるんだよ。わかるだろ？
今の芝居は今までとはちがう。一人一人の目論見から赤沢を穴山に仕立てた今までの芝居とはわけがちが
う。我々は今始めて共同して事に当たったんだよ。心をひとつにしたんだよ。芝居はしたがアングラじゃ
ない。誰に見せても恥ずかしくないオーソドックスな芝居だ。

妻 でもそれが、どうしたっていうの。

夫 団結したんだよ我々は。穴山小太郎という象徴のもとに初めて団結したんだよ！（男に）……きみは、
居直る必要はない。唯の、お直りでいい。一階の自由席から二階正面の指定席へ。きみは穴山小太郎だ。
我々にとって必要な男だ。

妻 なぜ？ なぜ必要なの？

夫 ゼラニウムのある家というやつ、死体を抱くおれというやつ、そういうものを信じていたければ、信じていてもいい。(順と夏江に)とことんまで遊びに徹しようというんなら、それはおまえたちの自由だ。おれがどういう人間であり、おまえたちがどういう人間であるか、その本当のところはどうでもいい。しかし、リカの前でおまえたちは今、一瞬正気に戻った。リカは世間だ。現実だ。おまえたちはそれを前にして、この男を穴山小太郎にもう一度仕立て上げた。そのことを自分でみとめなくてはならない！……私はね、たとえ本物の穴山小太郎が視察にこなくても、このままでは自然と穴山家にこの状況が耳にはいる、それをおそれていたんだよ。しかし、おまえたちもちゃんと知っていたんだ。だからこそ今。

(突然立上った順に) 順！ 終りまで聞け。

息子 …………… (坐る)

夫 嵐のような混乱……、不信と裏切りと幻想の氾濫の直後、リカが当然ながらいまだにこの男を穴山小太郎と信じている姿をまのあたりに見て、我々は正気に戻った。世間を、現実を、穴山家の存在を今さらながらに知らせてくれたのは、リカであると共にこの男だ。……わかるだろう琴江。我々が理性的に普通に生きていくためには、この男が、穴山小太郎が必要なんだよ。……我々は赤裸々になった。お互いの信用はもうかえってこないかも知れない。本物の秩序はもうこないかも知れない。それでもいい。一切の感傷を捨てて生きていこう。にせの秩序でも、それは力だ。穴山家に対して力だ。メトロポリタンドリームランド、五十万坪の土地を守ることができる現実的な力だ。私は今まで、センチメンタルであったことを告白するよ。もう、本当の秩序などはごまかない。あくまでにせの秩序でいい。このにせの穴山小太郎のもとに、現実に生きる力を結集しよう。私のこのパセティックな覚悟が、わからないはずはあるまい？

男 …………… (一步ふみ出す)

夫 穴山さん。お聞きのとおりだ。きみは今でも、私の、我々の家の天使なんだよ。たのむ。契約を延長してほしい。いや、新しい契約を結んでほしい。……さあ、おまえたちもたのおんだ。このひとだけが、我々をそれぞれの位置に正しく置いてくれるんだよ。高村氏が高村氏として、高村夫人が高村夫人として、高村家の息子が息子として、娘が娘として存在できる場所は、このひとを共有し、このひとを穴山小太郎としてみとめるところ以外にはない。……おまえたちはもう私のことを信じなくてもいい。私ももう、おまえたちの中に直接真実を探そうなどとは思わない。しかし、このひとをおして私をみとめてほしい。私もこのひとをおしておまえたちをみとめよう。そうすれば、依然として我々は、健全に生きて行くことができる。

妻 でも、このひとは、もう……

夫 このひとはリカの前で穴山小太郎としての姿勢を崩さなかった。まだやってくれるという証拠じゃないか。……ねえ、そうだろう、きみ。我々はね、きみとリカとの関係の中に、生きる方程式を見出したんだよ。

男 ……方程式。

夫 そう。

息子 (席を立ち、夏江に近づく)

娘 今のあのひとの演説、聞いた？

息子 効果があったんだよ、やっぱり。

娘 あたしたちのボーリングの…… (順と一緒に歩き出す)

息子 そう。もうすこしで、突きとおせる。むこう側に出る。

夫 順……。夏江……

息子 (立ちどまり、機嫌よく) いいでしょう！ 協力しますよ、もうすこし。

娘 もうすこしね。

二人、退場。

夫 琴江。おまえは？

妻 ……もうすこし、努力してみます。

夫 ありがとう。

妻 でも、ひとつだけ、うかがっておきたいの。……死んだ、あの女のひとのことを。

夫 まだそんな！

妻 本当なら本当だと云って。私、それをうけいれます。

夫 本当ではないんだから、本当だとは云えん！

妻 ……

夫 嘘でも、本当だと唯云ってもらいたいのかおまえは。

妻 いいえ。本当のことを云ってもらいたいの。

夫 だから云ってる！

男 奥さん。……ゼラニウムのあるうちのあの話は、順さんと夏江さんの創作です。つまり、嘘です。

妻 (目をかがやかして) そう。
男 信じていただけますか？
妻 ええ。信じます。……では。

琴江、静かに退場。

夫 ……すばらしい。早速きみは仕事をはじめてくれたな。すべて、私の思いどおりになりそうだ。

男 さあ、それはどうでしょう。あなたが犬と規定し、下劣ときめつけ、人間失格と断じたところの私の人となりは、べつに今も変わらない……。

夫 気を悪くしたのかい。私の唯感情的な言葉を気にするなんて、きみらしくないね。

男 私にも進歩したいという気持は……、すこしでも進歩したいという気持はあるんです。

夫 よく云ってくれた。私もそれを期待しているんだよ。きみは今、琴江に本当のことを云った。威厳をこめて、自分の言葉で云った。進歩への第一歩をふみ出したんだよまさに。

男 そうでしょうか。私は嘘を云ったのかも知れない。順さんと夏江さんはやっぱり死体を見たのかも知れない。

夫 迷っちゃいけない。今更迷うなんて。

男 私には迷う資格もないと、そう……

夫 今度はひがむのか？

男 ……

夫 ……きみは、リカが好きなんだろう？

男 ……（くるっと振り向く）

夫 （笑って）やっぱり凶星だ。……凶星だ。……きみは、リカがいるこの家から離れることができない。

この家にいたいという希望を私に信託し、そのかわりほぼ完全なかたちで私に従属するというきみの形式は、今でも変りないんだよ。それがきみの生きる方程式だ。きみはそれに耐えなければならぬ、リカといたければリカをだましつづけなければならぬ。リカにだけは素顔を見せてはならぬ。その形式が私たちを支え、きみを支えてくれるんだよ。

男 ……

夫 じゃ、期待している。（退場）

男がじっと立っていると、リカが紅茶をもって登場。

女中 どうもおおそくなりまして。レモンを切らしてしまっただもんですからひとつ走り行って買ってきたんです。

男 ……（きこえない）

女中 穴山さま。

男 （はっとして）ああ、どうも。

女中 クッキーかなにか、おもちしましょうね。（と、出て行きかける）

男 ……リカさん！

女中 は？

男 ……（重い沈黙のあと）私は、本当はね、

女中 ……

男 ……ほんとうは、舌平目という魚は、好きじゃないんだよ。

女中 舌平目……？

男 私がここへ来た、最初の日……

女中 ああ……。そうですか。わかりました。これから、気をつけます。（退場）

反対側から高村がそっと登場。

夫 あやうく思いとどまったらしいね。

男 ……（どきりと振りかえる）

夫 くどいようだが、幻想を抱いてはならない。きみがリカとつながっていられる場所は、にせの穴山小太

郎という位置しきやアないんだよ。……心はリカに、顔は私たちに。だが、きみの心とは、いったい何

だ？ 心なんていうものがあるのかね？ きみにはもともと存在のかたちというものがない。……かたち

は、私がつくる。無理をしちゃアいけないよ。

男 ……（身動きできない）

リカがクッキーを持って戻ってくる。

女中 お待ちどうさま……。

夫 (奥へ、機嫌よく) 琴江。お茶がはいったよ。……順。夏江。

琴江、順、夏江が従順に戻ってきて坐る。

夫 ……穴山さん。紅茶がさめますよ。

男 ……(ゆっくりと振り向く)

女中 (男に) どうぞ。(と、云って出て行く)

男 ……(じっとリカを見送る)

家族たちはつつましくお茶を飲み、照明が変化して、

男 ……この家に、ひとりの素直な、何のたくらみもない、普通の少女がいたとすれば、どうしてそのような存在を愛さずにいることができましょう。……愛。私の、リカさんへの愛。……しかし、その私というのが問題です。穴山小太郎は私ではなく、リカさんのなかには赤沢伸吉は存在しない……。何かが宙に浮き、何かが地下に埋まっている。……もしかしたら、あの少女は、この家の、最後の、清らかな毘?

ビートルズの「ゴールデン・スランバー」が流れ始める。

家族たちがばらばらに席を立てて行く。

男 ……それにしても、私は、私のこれからの道を、今、高村氏におしえられたような気がします。そんなんです。私にはかたちというものがない。支えなければならぬ自分などというものはない。手をさしのべたい相手がいたら、何のためらいもなく手をさしのべればいい。……私のリカさんへの愛。もしかしたら、それにはかたちが、あるのかも知れない……

照明がもとへ戻り、リカが食卓をかたづけにくる。

男 (リカが出て行こうとすると) ……リカさん。

音楽、 “キャリイ・ザット・ウエイト” に移って行く。

男 ……きみは、いつまでここにいるの？

女中 さあ……それは今のところ……

男 きみは、このうちが気にいってるの？

女中 ええ。とても。

男 とても……？

女中 ええ。(行こうとする)

男 (言葉で追って) きみは、生まれはどこ？

女中 ……鳥取の、浜村というところなんです。

男 鳥取の、浜村……、ああ、貝殻節の。

女中 (急に目をかがやかせて) ご存知ですか!?

リカ、その途端、持っている盆がかたむき、食器が音を立てて床に散る。

音楽、やむ。

女中 すみません。つい……。

音を聞きつけて家族たちが集まってくる。

男 (リカと一緒に膝をついて破片を拾いながら) もう一度訊くけど、きみは本当にこのうちが気に入っているの。

女中 ええ。気に入っています。(家族に気がつく) ……すみません。(盆を持ち、出て行こうとする)

男 リカさん。ここにいてほしい。

女中 でも……

男 思い出してほしいことがあるんだよ。

女中 思い出してほしいこと……。何でしょうか。

男 私が初めてここへ来た日のこと、おぼえているかな。

夫 穴山さん。

男 (向き直って) ……高村さん。あの日以来私は、誰の味方でも誰の敵でもなく、誰にも嘘をつくが誰にも本当のことを明かしてしまう誇り低き男として、無為徒食をかさねてきました。いわば私は、電気掃除器のような男だった。誰かがコードを電源にさしこむ。スイッチを押す。モーターが回転する。ゴミを吸いこむ。床をきれいにする。しかし、床をきれいにしたのは、仕事をしたのは私じゃアない。私を操縦した人間、私に流れてくる電流。私は、操縦する人間をえらぶことがなかった。人間も電流も、私の上を素通りして、スイッチを切れば回転はゼロ。完全なるゼロ。

夫 リカ。さがってもいいよ。

男 ここにいなさい。

女中 ……(板ばさみ)

夫 穴山さん!

男 これを居直りと呼びたいのなら、どうぞそう呼んで下さい。私はもう、お直りはごめんだ。指定席へのお直りはごめんだ。自由席にとどまる。

夫 きみはもともと、正規の入場券を買っていない。

男 じゃア、買いましたよ。

夫 席は、ない。

男 それは、聞いてみなくてはわからない。(リカのほうを向く)
妻 待って。あたしから話します。

男 あなたが？ ……話せるわけではない！

妻 え……………？

男 奥さん。あなたに云っておく。私の、自分の言葉で。

妻 ……………

男 テラスにゼラニウムのあるうちの内側には、ひとつの空間がある。空間には時間がある。時間と空間には、事件がある。

妻 事件……………。どんな？

男 殺人。……………もし時間が過去なら、空間に死体がひとつ。もし時間が未来なら、やがて死体になるからだがひとつ。

妻 ひとつ……………？

男 そして、おすすめしたいことがひとつある。空間はあすこにもあるがここにもある。時間もある。足りないものを買いなさい。ゼラニウムの鉢を！ このサンルームと二階のテラスをゼラニウムで飾ること。高村家のまわりをゼラニウムでいっぱいにすること。そして死体は、ひとつよりふたつ。ふたつより三つ。三つより四つ。

妻 …………… (恐怖)

男 想像力はエネルギーだと云いましたね。たしかにそうだ。想像力は、殺人の技術。誰がそのわざをふるうか、それだけが残された問題だ。

夫 ……………穴山さん。

男 私は、穴山じゃアない。赤沢伸吉だ……………そうなんだよりカさん。

女中 ……………

夫 赤沢伸吉でもない！ …… 私たちを見て立て。私のほうを。

男 …………… (高村とむかい合う)

夫 そう。 …… もう一度云う。きみを支えているものを忘れてはならぬ。

男 私を支えているものは …… 私のうちろにいる。(そこにはリカが)

夫 リカのうちろには私がいる。(リカのうちろに順がくる)

妻 私も。(順のうちろに夏江がくる)

息子 へ橋の上で、踊るよ踊るよ

娘 へ橋の上で、輪になって踊る

男、リカの手をひっぱり、順と夏江から引き離す。

男 リカさん。あの日私は、玄関じゃアなく庭に立っていた。きみを見てこんちはと云った。きみもこんにちはと云った。そうして、ああ穴山さんですね …… 私は返事をしなかった。あの時の返事を今しようと思うんだよ。

妻 穴山さん ……

男 私は穴山小太郎じゃアない。赤沢伸吉。本屋の息子の赤沢伸吉は、空巢なんだよ。空巢になったんだよ。

女中 ……空巢。

男 そう。

女中 では、あなたは、穴山さんではないんですか？

男 ないんだよ。

妻 ああ……とうとう。

男 そのことをこの家族は、あの日の夜からみんな知っていた。知っていながら私を穴山小太郎に仕立てあげた。そうして私を電気掃除器のように使いはじめたんだよ。

女中 ……………

男 これだけでももう充分だろう。私は、本物の空巢だ。その私を……。みんな、普通じゃアないんだよ。きみだけが普通の人間だった。だから私は、

女中 私だけが普通だって、どういうことですか？

男 え…………？

女中 旦那さまや奥さまが、あなたのことを穴山さんだっということにしたのは、それなりのわけがあったんではないんですか？

男 リカさん……

女中 私はそのわけを存じませんが、私は女中ですから、そんなことは知らなくてもかまわないんです。

男 リカさん……

女中 このおたくの皆さんは、みんないい方です。あたくし、ほかのご家庭は知らないんですけど、ここのおたく以上は、ちよっとのぞめないと思うんです。日曜は一日中自由ですし、洋裁のお稽古にも通わせていただいていますし、お給料だって、

男 ……私はね、空巢なんだよりカさん。忍びこんで、盗んで、出て行くところだったんだよ。その私を、この家族は、

女中 ですから、それには何かのわけが、

男 そのわけというのを説明しろと……

女中 いいえ。べつにあたくし、知りたくはありません。だって、皆さんいい方だっていうことはたしかなんですもの。悪いことをなさるはずが。……だいいち、あなたは何のご不満があつてそんな……。私もできただけお世話しましたし、皆さんがあなたに気をおつかいになって、いたれりつくせりではなかつたんですか？

男 ……リカさん。私はね、このうちの人間はね……。ああ、リカさん。きみには、どんな言葉をつかつたらしいんだ……

息子 オアシスには水がなかつた。

娘 とうに涸れて、涸れて……

夫 ふふ……。 (次第に大きく笑い出して) 赤沢君。きみのおかげでひとつ発見したよ。きみにもわかつたろ。……リカは、私がきみを穴山さんだと云えば、穴山さんとしてあつかう。そのほかのことは、何にも、何にも関係はないんだよ。

妻 リカさんこそ、女中のなかの女中だわ。

夫 まさにね。

妻 もうさがってもいいわよ。

女中 はい。

男 リカさん。きみが女中のなかの女中なら、このうちのことは私以上に知っているはずだ。眼をつぶることはしないんだよ。耳をふさぐことはないんだよ。このうちに忠義をつくすことはないんだよ。

女中 忠義……？

妻 …………… (高笑い)

男 (迫って) きみは、本当にこのうちが好きなのか。

女中 ええ。好きです。私の田舎のうちみたいに陰気なところがどこにもなくて、さっぱりと近代的で……。

男 近代的……。

女中 もちろん自分のうちではありませんけど、雰囲気は、私だって楽しめます。

男 雰囲気……。

女中 自分が進歩できるような気がするんです。魚くさい浜村にいるより。

男 進歩……。

女中 そうです。

男 ……よろしい。それじゃア、このうちの雰囲気というものをおしえてやろう。きみにわかるように、私
が本当の雰囲気をつくってやろう。それがせめてもの、きみへの心づくし。私の愛……。

妻 ……愛。……私の愛。

息子 オー・ベス。ベス!

娘 ユーイズマイウーマンナウ!

妻 (なぜか感動して) 穴山さん。赤沢さん。あなたの愛って、いったい……

夫 琴江。

妻 聞いた？　せめてもの心づくし。私の愛。愛……

息子 オー・ベス！

夫 （琴江の肩をおさえて）ここが肝腎なところだ。普通になれ。

妻 （とりあわず）あなたはやはり、えらばれた空巢よ。

息子 同じ穴のムジナ。

妻 えらばれた……

夫 琴江……。

男 高村さん。こうなった今、私をこれからどう使うつもりですか。

妻 使うだなんて、

男 どんな道具に仕立てるつもりですか。

妻 道具だなんて、

男 ここにいろと云われるなら私はいてもいい。出ていけと云われるなら出てもいい。

妻 行かないで。

男 しかし、予告しておきます。いずれにしても私は、いつかこのうちに四つの死体をならべる……。
妻 ……………

男 空巢としてはいい、殺人者として去る。それが私の、進歩だ。本当の。

夫 きみを解雇する！

妻 あなた……

息子 解雇に反対。

娘 いつ寝首を搔かれるかわからないなんて……。きっとよく眠れるわア。

息子 ぞくぞくする。

妻 このひとは私たちを心から憎んでいるわ。心から愛しているからよ。そういうひとは必要よ。そういうひとこそ。

夫 危険すぎる。

妻 危険だからこそ！ ……いてちようだい赤沢さん。あたし、ゼラニウムの鉢を買うわ。テラスもサンルームもゼラニウムでいっぱいにするわ！

息子 一晚中尺八を鳴らして、

娘 これぞ、狂わんばかりの静けさ。

妻 温度がだんだんさがっていくよう。絶対零度におかかって……

息子 寒い……。

娘 冷めたい。

妻 ……凍る。

男 (リカに) きみはどう？ 寒気がしてこないかい？これがこのうちの雰囲気なんだよ。

妻 快よい寒気。

男 いやアな寒気。

女中 ……。

夫 リカ。私を信じなさい。私がいる限り、このうちのけじめは私がつける。温度計は私だ。物差は私だ。

男 どうぞ。死体のならべ方はどうぞご自由に。

夫 リカ。警察に電話を！

女中 ……………

夫 リカ。

女中 はい。（行きかける）

男 （立ちはだかって）……………本当に、電話を？

女中 ええ。

男 なぜ!?

女中 旦那さまが、そう、そうおっしゃるからです。

男 きみは……………きみも、普通じゃない！

女中 こわいんです。

男 何が……………誰が……………？

女中 あなたと、奥さまと、それから、（順たちを見る）

夫 そうだ。普通なのは……………リカ、おまえと私だけだ、行きなさい。

女中 はい。

男 （肩をつかんで）きみは女中だ。人間だ。電気掃除器じゃアない。

女中 ……………離して。

男 きみは、えらべるんだよ。電流を。操縦する手を。電気掃除器じゃない……………
（知らぬうちにリカの首を締めていく）

女中 くるしい……

夫 何をする！

割って入ろうとする高村を、順と夏江が羽がいじめにしてとめる。

男 (力をいれながら) リカさん。きみは、えらべるんだよ。

夫 離せ！ とめる！ リカが殺される。殺人がおこなわれようとしているんだぞ！

娘 現実ね、これ。(父親をしっかりと抱きとめている)

息子 やっとこのうちに穴があく。(父親をおさえつけて離さない)

夫 琴江。とめる。おまえたちも共犯になるんだぞ！

男 ……。(高村の声はっとして我にかえり、順と夏江が高村をおさえているのを見る)

妻 なにをしているの。早く、早く……

男 ……。(リカのからだを離す)

しかし、その時すでにおそく、もろく床にくずれるリカ。

妻 ……死んだわ。

夫 リカ……。 (リカのところへ)

男 …… (琴江たち三人を見つめ、一歩ふみ出すが、すぐにリカのほうへ向き直り、高村をはねのけて) ……

……リカさん。

妻 死んだわ。とうとう。

娘 現実に。

男 ……リカさん。

妻 死体が……、やっと、ひとつ。

息子 現実に。

夫 ……

妻 ……

息子 ……

娘 ……

男 (リカに顔を寄せて) ……リカさん。このうちの雰囲気、わかったろ。何にも見えまい。何にもきこえまい。まるで、空巢なんだよ。

妻 今はもう、空巢ではないわ。死体がひとつ。

夫 現実に。

男 …… (高村を振りかえる)

夫 しかし、死体をつくったのはきみじゃアない。きみは道具にすぎなかった。最後まで。

男 ……おそらく、おっしゃるとおりかも。……殺人の技術、お見事です。(高村に) 死体を死体置場へおくのは、あなたの役目だ。上品に秩序正しく。お楽しみなことです。

葬送のラッパ（実は物売りの……）が鳴りひびき、男は下手（幕のそと）へ行き、家族は死体のうしろに集まる。
鳴りつづけるラッパの音。

妻（ラッパに耳をすまし）……金魚売りだわ。金魚売りがきた。

出て行こうとする琴江。止める高村。それを見つめる順と夏江。——四人、そのまま静止する。

家族たち、黒いシルエットになり、リカの死体が起きあがって退場する。

四

（リカに似た）女中が電気掃除器を押しながら登場。それを男が見る。

男 ……その後間もなく、高村家に、新しい女中がきました。リカさんとそっくりですが、これはリカさんではありません。要するに、女中なんです。

女中 ……（掃除をしている）

男 (話しかける) きみは、いつここへ来たの？

女中 ついこの間です。

男 いつまで、ここに居るの？

女中 さあ。それは今のところ……

男 このうちを、気にいつてるの？

女中 ええ。とても！

男 ……前にいた女中さんはね、このうちの人間に殺されたんだよ。

女中 殺された……？

男 死体が、どっかに隠してあるはずだよ。探してごらん。

女中 なぜそんなお話をなさるんですか。

男 その電気掃除器の中かも知れない。リカさんの死体がゴミを吸いこんでるのかも知れないよ。

女中 リカさん……？

男 ゴミを吸いとるほど、力が強くなるんだよ。そのうち、人間の、臓物という臓物を吸いとるほど、強く

なるかも知れないよ。

女中 気持が悪い……。

女中は男から離れ、懸命に掃除器をうごかす。その手つきは、櫓漕ぎに似ている。

どこからか、貝殻節がきこえてくる。

「何の因果で 貝殻漕ぎなると」

「〜かわいいやのう　かわいいやのう」
女中が掃除器を押しながら消えてゆき、貝殻節の最後の合の手「よいやさあ！」の声を男が叫んだとき舞台はすでに闇になっている。

—幕—

底本.. 『八木柁一郎戯曲集 第一巻』

白水社

1992年5月10日印刷

1992年5月28日初版